



てきすとぽい杯

VOL

8

<http://text-poi.net/>

夏の
24時間
耐久

目次

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第8回 募集要項

第8回 審査結果

入賞作品紹介

《大賞》

〈夏の犬三角賞〉

『鳥獣戯画』 碧 獲得☆ 4.267

《入賞》

〈夏の犬三角賞〉

『金魚、おなかがペコペコです。』 丁史ウイナ 獲得☆ 4.143

『珠算赤魚』 塩中吉里 獲得☆ 4.000

『泡沫の夢』 志菜 獲得☆ 3.933

〈候補作品〉 ※得票順

『おいらは出目金』 ひこ・ひこたろう 獲得☆ 3.917

〈夏の犬三角賞〉

『彼の手土産』 碧 獲得☆ 3.857

『氷の海にて』 永坂暖日 獲得☆ 3.846

『アルキメガデテルスく語りき』 太友 豪 獲得☆ 3.846

『華麗に変身！「スーパー金魚君」』 豆ヒヨコ 獲得☆ 3.833

『末尾：金魚』 栗田柚香 獲得☆ 3.818

『移住』 6de 梨 獲得☆ 3.786

『おとなになるまで』 塩中吉里 獲得☆ 3.769

『御祭り金魚の里帰り』 晴海まどか 獲得☆ 3.750

『キンギョソウ』 永坂暖日 獲得☆ 3.727

〈シリーズ作品賞〉

『世界遺産シリーズ2 人間ポンプ、長城をゆく』 しゃん 獲得☆ 3.714

『電気金魚の夢を見るのは誰か?』 茶屋 獲得☆ 3.706

『金魚の誘惑』 栗田柚香 獲得☆ 3.643

『ミス・ゴールドフィッシュ』 豆ヒヨコ 獲得☆ 3.643

『アナカリスになりたい』 晴海まどか 獲得☆ 3.625

〈てきすとばい杯賞〉

『赤い魚』 茶屋 獲得☆ 3.625

『今日も食らう』 コユキ キミ 獲得☆ 3.615

〈夏の太三角賞〉

『乾いた海と光る鱗』 碧 獲得☆ 3.615

『最後に見たのは』 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.583

『茜色ひとつ』 斜芭萌葱 獲得☆ 3.571

〈夏の太三角賞〉

『ゴールデンフィッシュにうってつけの日』 丁史ウイナ 獲得☆ 3.571

『さらばデメ太郎、達者でな!』 犬子蓮木 獲得☆ 3.538

『落ち無し? (一コマ)』 うわああああああ 獲得☆ 3.538

『金魚累々』 Wheelie 獲得☆ 3.533

『私は出目金』 ひこ・ひこたろう 獲得☆ 3.500

〈ライブ執筆賞〉

『ポンプ』 松浦徹郎 獲得☆ 3.462

『おはかまいり』 めぐる 獲得☆ 3.385

『空の金魚鉢にシラハを』 犬子蓮木 獲得☆ 3.385

〈夏の太三角賞〉

『水槽キンギョ船団』 丁史ウイナ 獲得☆ 3.375

〈シリーズ作品賞〉

『世界遺産シリーズ1 狂王からの贈り物』 しゃん 獲得☆ 3.312

『泣かなかった日』 [伊守梟](#) 獲得☆ 3.231

『金魚売』 [松浦徹郎](#) 獲得☆ 3.214

『いちねん金魚』 [まな](#) 獲得☆ 3.200

〈番外作品〉 ※投稿順

『金夜、近所で、金魚すくい』 [とおる改](#) 獲得☆ 3.727 (制限時間後に投稿)

〈同じお題を用いた作品〉

[同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介](#)

終わりに

[終わりに](#)

[てきすとぼい広告](#)

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012 年 2 月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集う WEB 作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013 年 1 月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぽい杯は、制限時間 1 時間＋推敲 15 分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

第 8 回は〈夏の 24 時間耐久〉と題しまして、制限時間を 24 時間まで拡張し、全作品が 1,000 字ジャストで、その出来栄を競いました。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第 8 回てきすとぽい杯

会 場 : <http://text-poi.net/vote/28/>

お 題 : 「金魚」

金魚を題材に、1,000 字ジャストの小説を書いてください。

「金魚」という言葉は直接使わなくても構いません。

投稿期間 : 2013 年 8 月 17 日 15:00 ~ 翌 18 日 15:00

審査期間 : 2013 年 8 月 18 日 15:00 ~ 2013 年 9 月 1 日 24:00

第 8 回には、てきすとばい杯初参加の 7 作者さんを含む 38 作品（全て、ちょうど 1,000 字）をお寄せいただき、審査期間を一週間延長しての開催となりました。

第8回募集要項

【投稿について】

投稿期間：

8月17日（土）15:00 ～ 翌18日（日）15:00

今回は〈夏の24時間耐久〉となります。

お題発表から24時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

また、今回は制限時間がやや長いため、字数制限を設けたいと思います。

てきすとぼいの字数カウンタで1,000字ちょうどになるよう、作品の長さを調節してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/28/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

【審査について】

審査期間：

8月18日（日）15時 ～ 9月1日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。

個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第8回審査結果

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1位 ☆ 4.267

『鳥獣戯画』 碧

<http://text-poi.net/vote/28/21/>

投稿時刻: 2013.08.18 09:05 最終更新: 2013.08.18 09:35

総文字数 : 1000 字

2位 ☆ 4.143

『金魚、おなかがペコペコです。』 丁史ウイナ

<http://text-poi.net/vote/28/35/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:56

総文字数 : 1000 字

3位 ☆ 4.000

『珠算赤魚』 塩中吉里

<http://text-poi.net/vote/28/32/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:12

総文字数 : 1000 字

4位 ☆ 3.933

『泡沫の夢』 志菜

<http://text-poi.net/vote/28/27/>

投稿時刻: 2013.08.18 12:28

総文字数 : 1000 字

5位 ☆ 3.917

『おいらは出目金』 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/28/25/>

投稿時刻: 2013.08.18 10:53

総文字数 : 1000 字

6位 ☆ 3.857

『彼の手土産』 碧

<http://text-poi.net/vote/28/33/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:16 最終更新: 2013.08.18 14:25

総文字数：1000 字

7 位 ☆ 3.846

『氷の海にて』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/28/24/>

投稿時刻: 2013.08.18 10:48 最終更新: 2013.08.18 11:28

総文字数：1000 字

8 位 ☆ 3.846

『アルキメガデルスく語りき』 太友 豪

<http://text-poi.net/vote/28/28/>

投稿時刻: 2013.08.18 12:36

総文字数：1000 字

9 位 ☆ 3.833

『華麗に変身！「スーパー金魚君」』 豆ヒヨコ

<http://text-poi.net/vote/28/16/>

投稿時刻: 2013.08.18 04:10 最終更新: 2013.08.18 11:06

総文字数：1000 字

10 位 ☆ 3.818

『末尾：金魚』 栗田柚香

<http://text-poi.net/vote/28/36/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:59

総文字数：1000 字

11 位 ☆ 3.786

『移住』 6de 梨

<http://text-poi.net/vote/28/29/>

投稿時刻: 2013.08.18 12:39 最終更新: 2013.08.18 12:58

総文字数：1000 字

12 位 ☆ 3.769

『おとなになるまで』 塩中吉里

<http://text-poi.net/vote/28/14/>

投稿時刻: 2013.08.18 01:34

総文字数：1000 字

13 位 ☆ 3.750

『御祭り金魚の里帰り』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/28/7/>

投稿時刻: 2013.08.17 20:27 最終更新: 2013.08.17 21:26

総文字数 : 1000 字

(番外) ☆ 3.727

『金夜、近所で、金魚すくい』 とおる改

<http://text-poi.net/vote/28/38/>

投稿時刻: 2013.08.18 15:11

総文字数 : 1000 字

14 位 ☆ 3.727

『キンギョソウ』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/28/37/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:59

総文字数 : 1000 字

15 位 ☆ 3.714

『世界遺産シリーズ2 人間ポンプ、長城をゆく』 しゃん

<http://text-poi.net/vote/28/30/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:01

総文字数 : 1000 字

16 位 ☆ 3.706

『電気金魚の夢を見るのは誰か?』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/28/10/>

投稿時刻: 2013.08.18 00:22

総文字数 : 1000 字

17 位 ☆ 3.643

『金魚の誘惑』 栗田柚香

<http://text-poi.net/vote/28/26/>

投稿時刻: 2013.08.18 11:55

総文字数 : 1000 字

18 位 ☆ 3.643

『ミス・ゴールドフィッシュ』 豆ヒヨコ

<http://text-poi.net/vote/28/12/>

投稿時刻: 2013.08.18 00:49 最終更新: 2013.08.18 03:04

総文字数 : 1000 字

19 位 ☆ 3.625

『アナカリスになりたい』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/28/13/>

投稿時刻: 2013.08.18 01:19

総文字数 : 1000 字

20 位 ☆ 3.625

『赤い魚』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/28/1/>

投稿時刻: 2013.08.17 16:08

総文字数 : 1000 字

21 位 ☆ 3.615

『今日も食らう』 コユキ キミ

<http://text-poi.net/vote/28/4/>

投稿時刻: 2013.08.17 17:44 最終更新: 2013.08.18 05:58

総文字数 : 1000 字

22 位 ☆ 3.615

『乾いた海と光る鱗』 碧

<http://text-poi.net/vote/28/23/>

投稿時刻: 2013.08.18 10:12

総文字数 : 1000 字

23 位 ☆ 3.583

『最後に見たのは』 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/28/34/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:52

総文字数 : 1000 字

24 位 ☆ 3.571

『茜色ひとつ』 斜芭萌葱

<http://text-poi.net/vote/28/2/>

投稿時刻: 2013.08.17 16:36

総文字数 : 1000 字

25 位 ☆ 3.571

『ゴールデンフィッシュにうってつけの日』 丁史ウイナ

<http://text-poi.net/vote/28/15/>

投稿時刻: 2013.08.18 03:12

総文字数 : 1000 字

26 位 ☆ 3.538

『さらばデメ太郎、達者でな！』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/28/20/>

投稿時刻: 2013.08.18 06:45

総文字数 : 1000 字

27 位 ☆ 3.538

『落ち無し? (一コマ)』 うわああああああ

<http://text-poi.net/vote/28/19/>

投稿時刻: 2013.08.18 06:31 最終更新: 2013.08.18 06:33

総文字数 : 1000 字

28 位 ☆ 3.533

『金魚累々』 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/28/6/>

投稿時刻: 2013.08.17 20:05

総文字数 : 1000 字

29 位 ☆ 3.500

『私は出目金』 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/28/22/>

投稿時刻: 2013.08.18 09:47

総文字数 : 1000 字

30 位 ☆ 3.462

『ポンプ』 松浦徹郎

<http://text-poi.net/vote/28/31/>

投稿時刻: 2013.08.18 14:05

総文字数 : 1000 字

31 位 ☆ 3.385

『おはかまいり』 めぐる

<http://text-poi.net/vote/28/9/>

投稿時刻: 2013.08.17 23:03

総文字数 : 1000 字

32 位 ☆ 3.385

『空の金魚鉢にシラハを』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/28/18/>

投稿時刻: 2013.08.18 05:07

総文字数 : 1000 字

33 位 ☆ 3.375

『水槽キングヨ船団』 丁史ウイナ

<http://text-poi.net/vote/28/3/>

投稿時刻: 2013.08.17 17:10 最終更新: 2013.08.17 21:11

総文字数 : 1000 字

34 位 ☆ 3.312

『世界遺産シリーズ1 狂王からの贈り物』 しゃん

<http://text-poi.net/vote/28/17/>

投稿時刻: 2013.08.18 04:31

総文字数 : 1000 字

35 位 ☆ 3.231

『泣かなかった日』 伊守梟

<http://text-poi.net/vote/28/11/>

投稿時刻: 2013.08.18 00:23 最終更新: 2013.08.18 04:25

総文字数 : 1000 字

36 位 ☆ 3.214

『金魚売』 松浦徹郎

<http://text-poi.net/vote/28/8/>

投稿時刻: 2013.08.17 22:41

総文字数 : 1000 字

37 位 ☆ 3.200

『いちねん金魚』 まな

<http://text-poi.net/vote/28/5/>

投稿時刻: 2013.08.17 18:25

総文字数 : 1000 字

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/28/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 4.267

『鳥獣戯画』

<http://text-poi.net/vote/28/21/>

著：碧

この物語の主演は、誰だろう、金魚のあれであります。

ふざけているかに見えて、金魚とその周囲に暮らす小さな生き物たちの人生を、そして壮大な生命の連鎖をも感じさせる名作。最高票を獲得し、38 作品の頂点に輝きました。読み終えたら最後にもう一度、題名を見てください。きっと、味わいが増すはず。

《入賞 3 作品》

獲得☆ 4.143

『金魚、おなかがペコペコです。』

<http://text-poi.net/vote/28/35/>

著：丁史ウイナ

お腹がすいてお腹がすいてたまらなくなった金魚、ある日、お空へ飛び立ちます。

そこには、いっぱい食べ物がある。でも……？

童話のような歌詞のような、軽快なリズム感と、哀愁ある物語展開が強く印象に残る、異色の作品です。

獲得☆ 4.000

『珠算赤魚』

<http://text-poi.net/vote/28/32/>

著：塩中吉里

古代中国は宋の都。陳銘という男が、儲け話があると言って友人・鄭の家を訪れていた。

金魚発祥の歴史とも重なる、この男の言う金になる話とは？

——その泳ぐさまが映像で浮かぶような、一風変わった金魚の起源譚です。

獲得☆ 3.933

『泡沫の夢』

<http://text-poi.net/vote/28/27/>

著：志菜

大阪、和光寺あたりで貸し本屋を営む信之介は、
馴染み客でもある一人の女に、密かな恋心を抱いており……。
時代情緒あふれる描写と、どこか刹那的な男女の駆け引きが、高い評価を獲得しました。

《特別賞》

《てきすとぽい杯賞》

『赤い魚』

<http://text-poi.net/vote/28/1/>

著：茶屋

お題発表後 1 時間 8 分での投稿は、通常回（執筆 1 時間＋推敲 15 分）でも制限時間内でした。

《夏の大三角賞》

『水槽キンギョ船団』

<http://text-poi.net/vote/28/3/>

『ゴールデンフィッシュにうってつけの日』

<http://text-poi.net/vote/28/15/>

『金魚、おなかがペコペコです。』

<http://text-poi.net/vote/28/35/>

著：丁史ウイナ

『鳥獣戯画』

<http://text-poi.net/vote/28/21/>

『乾いた海と光る鱗』

<http://text-poi.net/vote/28/23/>

『彼の手土産』

<http://text-poi.net/vote/28/33/>

著：碧

24 時間以内に 3 つの作品を投稿してくださった方が、お二方いらっしゃいました。
『鳥獣戯画』『金魚、おなかがペコペコです。』は、それぞれ、大賞、入賞とのダブル受賞となります！

《ライブ執筆賞》

『ポンプ』

<http://text-poi.net/vote/28/31/>

著：松浦徹郎

Google+ ハングアウトに開設した休憩所で、ライブ中継をしながら執筆された作品でした。

《シリーズ作品賞》

『世界遺産シリーズ 1 狂王からの贈り物』

<http://text-poi.net/vote/28/17/>

『世界遺産シリーズ 2 人間ポンプ、長城をゆく』

<http://text-poi.net/vote/28/30/>

著：しゃん

世界遺産と金魚を軸線とする、シリーズものの連作掌編に挑戦してくださいました。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！

素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

投稿時刻 : 2013.08.18 09:05

最終更新 : 2013.08.18 09:35

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 4.267

《大賞受賞作品》

《特別賞・夏の大三角賞》

鳥獣戯画

碧

我輩は金魚の糞である。名前はまだない。何しろ生まれたばかりである。たいそうな難産であった。お産が始まってから長い間、母から離れることが出来ず水槽の中を彷徨っていた。やがて母の排泄口から独り立ちすると、まだ泳げない我輩はゆっくり水の中を落ちてゆき、水草の狭間に収まった。

生まれたばかりの我輩はものを知らぬ。自分が金魚の糞と呼称されるべき存在である事を知ったのは、日に何度か水槽を覗き込む動物の雛が我輩をそう呼んだからである。まだ母にしがみついていた頃、我輩を指差して、

「あ、金魚が糞してる！ 金魚の糞だ！ 長えな！」

と叫びはしゃいだ。騒々しい水槽の外の様子など我関せずと言ったていで、母は友と閑談に興じていた。「学校の水槽にいと、無駄な知識が増えるわ」

「私はあのまま店で売れ残るか、こんな水槽に入れられる前に小川に流された方がましだったと思う」

金魚の糞の正確な定義は知らぬが、少なくともこの水槽には我輩しかおらぬようである。しかし、水槽の外には一匹の金魚の糞がいるようだ。それはいつも黒板の前で怒鳴ってばかりいる動物の雄で、雛達は彼の者が大声をあげる度に身を竦め縮こまっている。雛達の親玉なのだと思っていたが、ある日、廊下で教頭という名の初老の雄の後ろを歩いている彼の者を指差し、雛の一匹が嘲るように笑った。

「見ろよ、金魚の糞だぜ」

それで、どうも彼の者が我輩の同胞であるらしいとわかったのだが、彼の者はあまり水槽に寄り付かぬ。黒板の前にばかりいる。今日も大声で雛達を叱りつけている。

「お前らはどうして動物を大切にしようという心がないんだ！ ウサギがかわいそうだと思わないのか！心を込めて世話をしなさい！」

静まり返った教室を眺めながら、ぐったりした母がぼつりと呟いた。

「私達の事も大切にしてほしいわね。ここ、直射日光が当たって暑いわ」

そんな我輩の日常にもついに大きな変化が訪れた。母達と水草は青いバケツの中へ、我輩は、母の友が永年望んでいた小川へと引き離されたのだ。水槽とは違う濁った冷たい水を泳いでいると、空から新たなる友が現れた。

「やあ、君は金魚の糞だね。僕は鳥の糞だ。よろしくな」

快活で知的な鳥の糞なるものに好感を抱いた我輩は聞いてみた。

「我々はこの先どうなるのか、ご存知ですか」

「知っているとも。このどぶ川は大きな川に合流して、海まで流れていき、微生物に分解され、地球上のあらゆる生命の糧になるのさ」

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:56

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 4.143

《入賞作品》

《特別賞・夏の大三角賞》

金魚、おなかがペコペコです。

丁史ウイナ

その一＊金魚、お空を飛びます。

金魚、おなかがペコペコです。
タケルくんが、エサをくれない。
タエコママも、ヒロシぱぱもくれない。
だから金魚は、お空を飛びました。

青いお空には、綿菓子がいっぱい！
ふわふわの綿菓子。
おくちに含んで、
けれど綿菓子は消えてしまいました。

金魚は悲しくなりました。
しくしく涙を流します。

地面に涙が降り注ぎ、
植物たちは、元気いっぱい。
ぐんぐん、ぐんぐん、空まで伸びて。
お空に木の実がなりました。

金魚は、ぱあっと太陽みたいに、
ほほえみ顔を輝かせ、
おくちを大きく広げたら、
夢から覚めて水のなか。

その二＊金魚、海へ行きます。

金魚、おなかがペコペコです。
タケルくんが、エサをくれない。
タエコママも、ヒロシぱぱもくれない。
だから金魚は、海へ行きました。

青い海は、色とりどり。
深緑のわかめや、
薄緑のうみぶどう。

金魚は海の畑を泳いで、
そこにいた、ヒトデさんに、
食べ物を分けてください、
と言いました。

優しい姿のヒトデさん。
好きなだけお食べ。
嬉しい言葉に、涙がぽろぽろ。
夢から覚めても、涙ぽろぽろ。

その三＊金魚、宇宙を駆けます。

金魚、おなかがペコペコです。
タケルくんが、エサをくれない。
タエコママも、ヒロシぱぱもくれない。
だから金魚は、宇宙を駆けました。

宇宙の闇には、つぶつぶの光。
星のまわりをまわるゴミ。
そこまで泳いで、光を見ると、
それは、鉄のかたまりで。

宇宙を駆けて、食べ物さがし。
水星はただ熱いだけ。

火星の砂漠、なにもなく。
木星の海にも、なにもなく。

金魚は遠くへ遠くへ駆けて、
なにかないかと探します。
けれどもなにも。
ここにはなにもないのです。

地球に戻り、ゴミの軌道。
辿ってみたら、鉄のくず。
おくちをあけて、食べてみて。
吐き出したくても、もう出ない。

金魚は涙を宇宙に流し、
丸い水滴、飛んでゆく。
夢から覚めたら、水槽のなか。

その四＊金魚、水槽にいます。

金魚、おなかがペコペコです。
タケルくんが、エサをくれない。
タエコママも、ヒロシぱぱも、
やっぱりくれない。

水槽のなかの、他の金魚たち。
ぐったりしていて、動かない。
ぼこぼこ泡が、出ているところ。
おくちを開けて、泡を食べても、
おなかは全くふくれません。

ぐったりしている金魚のそばに、
金魚の卵が、眠ってる。
金魚がそこまで泳いでも、
誰も動きやいたしません。

ああ、卵は木の実のようだ。
ああ、卵はうみぶどう。

金魚、おなかがペコペコです。

おくちを開けて、
泣きました。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:12

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 4.000

《入賞作品》
珠算赤魚
塩中吉里

金魚発祥の歴史は古代中国南北朝時代までさかのぼると言われている。

※

黄巾の乱に端を発した三国時代もはや一五〇余年も過去の話――西暦四三五年。元嘉の治と称される、後世から見て比較的安穏で文化的なこの時代、中国大陸江南に興った宋の都建康（南京）の大通りをゆく一人の男がいた。男の名は陳銘。元は地方役人の家に生まれた次男坊だったのだが、幼少時より手のつけられぬ悪童であったため、国子学の学生に潜り込んで二年で放校に処された事件以後、親族からは絶縁を宣言されている。その陳であるが、彼はいま六尺一寸の背丈を窮屈そうにかがめ、腹の前に大きな鉢を抱えて、国子学時代の知己である鄭という男の家を目指しているのだった。

「それで、これが、何だって？」

「馬鹿野郎。二度も説明させる気か。金になる魚だと言っただろう」

建康の北ほどにある屋敷の前庭で、二人の男が鉢を囲んで座り込んでいる。陳と鄭その人である。鉢には水がなみなみと湛えられており、色鮮やかな赤い鱗の魚が数十匹、泳いでいるようだ。鄭は猜疑の目でもって隣の男を睨んだ。が、当の陳はどこ吹く風である。

「まあ見ている」

言うなり陳は両手を鉢の水に浸して、赤い魚を追った。掌を間仕切りのように使って、ちょうど十匹分の魚を手の中に囲い込む。魚たちは窮屈そうに身を寄せ合っている。

「一匹、中に入れてくれ」

陳が言うので、鄭はそうした。十一匹目の赤い魚を陳の囲いの中に放った途端、合わせて十一匹の魚は暴れ出し、陳の手の囲いを無理やり乗り越えて逃げ出した。その特徴的な逃げ方に、鄭はようやく陳の言葉を理解した。

「つまりこれを算盤にしようってわけな」

算盤、つまり、そろばんである。陳の手の中には一匹だけ魚が残っていた。九匹は陳の右手を乗り越え、一匹は左手を乗り越えた。そういう習性の魚なのだと、陳は言った。突然変異のこの赤い魚は、集団の数が増えたと、必ず二方向に別れて住処を移すのだという。

「確かに、こいつらで珠算をやったら壮観だろうなあ。……分かった。お偉い国子学に売り込んでやるよ」

うっそりと笑みかわして二人の男は別れた。

その後の記録はほとんど現存していないが、一説には、学府の奥に秘匿された赤い魚は交配を重ね、測量や天文の複雑な算学にたびたび用いられたと言われる。文化大革命の折に観賞用の金魚と混同されことごとく破壊され尽くすまで、美しい赤い魚たちは大陸の算学を支えたのである。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2013.08.18 12:28

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.933

《入賞作品》
泡沫の夢
志菜

阿弥陀池の辺にある小さな庵に、貸し本屋、信之介は入っていった。枝折戸を抜け、山のような荷物を背負ったまま薄暗い土間の奥に向かって「往来堂どす」と声を張り上げる。

ややあって、気だるそうな声が返ってきた。

「奥に回ってんか」

信之介は生垣の脇を通して、奥の内庭へと回る。小さいが贅を凝らした瀟洒な庵である。

釣りしのが掛けられた縁台の下で、一人の女がだらしなく着付けた浴衣の胸元を、団扇で扇いでいた。簾の陰に置かれたぎやまんの金魚鉢の光が、縁台にゆらゆらと影を落としている。

「今日はお一人ですか」

「飯炊き婆さんは孫の顔見に行った」

足の爪を気にしながら言う女に、信之介は頷きながら、背負った荷物を下ろした。風呂敷包みを広げながら尋ねる。

「この前の本はどないでした？ 続きが手に入ったんで持って参りました」

「もう一つやったな。どっかで読んだような話やった」

手元の煙草盆を引き寄せながら、つまらなさそうに女は言った。信之介は、いくつか黄表紙を取り出す。

「ほんならこれはどないでしょう。大店のご寮さんたちにも人気で――」

「どこかに旅に出るようなんはない？ 何もかも捨てて遠い所へ行くような」

信之介の言葉を遮って、女は言う。信之介は首を傾げる。

「……お伊勢はんとかでっか？」

煙管に葉を詰めた女が、ここで初めて信之介を見た。射る様な強い視線であった。

「持っていないなら、あんたが連れて行ってくれてもええけど」

信之介は目を見開き、それから、慌てて笑みを浮かべた。

「何言うてはるんですか。てんご言わんといってください」

「てんごとちゃう。あんたやから言うねん」

震える声で信之介は言った。

「わてが……わてが、惚れてること知ってて、からかってはるんでしょ？ 前に言うてはったやないですか。いつ来るかわからん旦那を待つだけの暮らしやったら、遊郭で客取ってたときの方が生き甲斐あったって。

わてやなくても、ええんでしょ？」

「……うちの言葉が信じられへんのやったら、もうええわ」

かんっ、と雁首を灰皿に打ちつけながら、女は言った。その横顔に満たされない憤りがあるのを信之介は知った。

風呂敷の上に並べた本を押しつけ、女の白い手首を掴む。

「本気で言うてはるんですね？」

女は信之介を見上げた。すぎるような目つきであった。

「手練手管で言うてるんと違う。うちは本気や」

夕刻、飯炊き女が帰ってくると、女の姿はなく、転がった金魚鉢の横で、金魚が白い腹を見せていた。

投稿時刻 : 2013.08.18 10:53

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.917

おいらは出目金

ひこ・ひこたろう

おいらはもうすぐ死ぬ。金魚すくいで捕まって以来、この家に厄介になっていたが、環境の違いで体調を崩してしまい、メシもろくに食えなかった。そればかりではない。弱ったおいらをこの家のガキが水からすくい上げ、新聞紙の上にのせたものだから、もう死ぬのは時間の問題だ。ガキは葬式の準備でもしているのだろう。公園から拾って来た小石を、おいらの前に並べている。このガキは生まれ時に色々あったようで、そのせいか学校での勉強も遅れがちだ。おまけに何の変哲もない石を集めるのが趣味だ。変わったやつである。こんなガキにポイで簡単に捕まったおいらの、何と不運なことか。賢い子に飼われたら、もうちょい長生きできたかもしれないのに。

お迎えが来た。天使って野郎がニヤニヤしながら、おいらに向かって来る。

「今回も無駄死だな。おい、今度は何に輪廻転生したい？」

「金魚以外なら、何でも。ああ、そうだ。人間になって、このガキに復讐するってえのもいいな」

「なんで？」

「見りゃわかるだろ、死に瀕したおいらを、おちょくるにもほどがある」

「はぁ？ お前も学のないやつだな。こいつはお前の回復を神に祈っているんだ」

「でもどうせ死ぬんだろ？ なあ、今度は人間に生まれ変わらせてくれ」

「お前にはまだ色々なものが足りないからな。人間は無理だ」

ガキは石をおいらの体の周りに並べ始めた。おいらの体を取り囲もうとしている。一体、何の儀式やら。おいらはもう死にそうだぞ。空気の中だと過呼吸で苦しいじゃないか。

あれ？ ガキが泣いている……。

「おい、天使。この石は何だ？」

「石には不思議な力があると、古代ユダヤ人は思っていた」

「でも、ここは日本」

「メッカの巡礼だって、あれは石の周りを回っているんだぜ」

「でも、ここは日本」

「この子も石に不思議な力を感じているんだ。石の力でお前を癒そうとしている」

「さすが馬鹿の考えることは違う」

「お前、ユダヤ教徒やイスラム教徒に殺される。パワーストーンとか、知らないのか」

「ふん」

その時、おいらの体に温かい水が落ちて来た。ガキの涙だ。こいつ本気で泣いている。

「おい、もう一度金魚に生まれ変わるのは可能か」

「できるよ」

「じゃあ、丈夫な体で、もう一度こいつの前に現れたい。おい、どこへ行く？ 聞いてんのか！」

「お前、死なないことになったから。この子の祈りが通じたようだ。もう、俺の出る幕じゃない。じゃあな」

もうしばらく金魚かよ。まあ、いいけどさ。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:16

最終更新 : 2013.08.18 14:25

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.857

《夏の大三角賞》
彼の手土産
碧

悠太が、いつもの能天気な笑顔でビニール袋を差し出してきたとき、だめかもしれない、と思った。
「あのさあ」

自分の声が恐ろしく攻撃的に聞こえた。

「何よ、お土産って。困るんだけど」

「何で？ 可愛いだろ、金魚」

甚平は着崩れている。男友達と夏祭りに出かけると言っていたから、仲間内でハメをはずしたのかもしれない。

「うち、金魚鉢も水槽もないし。研究が忙しくなったら家に帰れないこともあるし、世話なんかできないから。そんな事も考えないで釣って来たわけ。子供じゃないんだから」

「あー……」

気まずそうに悠太が頭をかいた。

「ごめん」

狭いビニール袋の中で、金魚が驚いたようにターンした。ひらひらと尾ひれが舞う。赤と黒の金魚が一匹ずつだった。

そうやってすぐに謝るところだ、と思った。

「でもこれ、どうしよう」

困ったように悠太がビニール袋を覗き込んだ。その目には、私に叱責された怒りや戸惑いなど微塵もなく、手元にいる小さな魚の行く末をただ純粋に案じているようだった。

昔なら、付き合ったばかりの頃なら、ここで私は毒気を抜かれていたと思う。

なのに、苛立ちが収まらなかった。

風呂場の手桶に放した金魚は元気よく泳いだ。緑の手桶の中は暗くて鑑賞もできない。wikipediaによると、金魚には上方向から鑑賞するものと横方向から鑑賞するものがあり、上方向から鑑賞するものの方が高価らしい。夏祭りの金魚など安価だろうから、不透明な桶に入れて上から見ていても楽しくないだろう。このまま買い続けるなら水槽か金魚鉢を買わなければならない。

結局腹の虫が治まらないまま悠太を帰して、部屋はむなしいほど静かになった。

なんであんな言い方してしまうんだろうといつも思う。

悪意があるわけじゃない、ちょっと考えが足りなかっただけだ。金魚が可愛いから私が喜ぶと単純に思ったのだろう。彼は心が優しくて、少しだけ軽率なのだ。そういうところに惹かれて恋に落ちたはずなのに、最近では何かあるごとに腹が立って一方的に責め立ててしまう。一緒にいると自分が嫌いになってしまう。お互いのためにそろそろ別れるべきなのだ。そう思ったのに、結局金魚を受け取ってしまった。

桶の中で赤い金魚がくるりと回った。それを追うようにして黒い金魚もくるりと回る。きっと横から見ればその尾ひれがゆれるのが見えて綺麗だろう。

明日、手ごろな金魚鉢を買いに行こうか。この金魚がいるうちは、まだ希望はあるだろうか。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2013.08.18 10:48

最終更新 : 2013.08.18 11:28

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.846

氷の海にて

永坂暖日

灰色の海の上を一匹の魚が泳いでいる。

丸々とした胴体は銀色で、頭は冠を載せたみたいに金色。ヒレはどれも白く透明で、端の方ほど赤い。泳ぐ姿はたっぷりある裾をさばくようだ。

これは金魚だとナミは言った。月の海を泳ぐ金魚なのだと。

「金魚は淡水魚だろ。海で泳いだら死んじゃうよ」

「これは海で泳ぐ金魚なの！」

「そんな金魚いないよ」

「ナギは分かってないなあ。だからいいんじゃない」

人間は想像する。海で泳ぐ金魚の姿を。

人間は創造する。月の海で泳ぐ金魚を。

ナミはそうして、機械仕掛けの金魚を作った。

月にはこの金魚以外に様々な機械仕掛けの動物がいた。植物もいる。それらの一部は僕とナミが作った物で、残りは僕らの両親、そのまた両親、さらにはその両親と、先祖達を作った物だ。

灰色の海はまさしく不毛の地でも、そこには色々な動植物が存在していた。

でも、どれ一つとして本物はない。

人間は想像する。月が動植物で溢れる光景を。

人間は創造する。月を動植物で一杯にするために。

剥き出しの月面で本物の生物が生きていけるはずもない。だから、先祖代々機械仕掛けの生物を作ってきたのだ。

地球の人間は滅びてしまったけど、人間という生物が存在した事の証として、色々な機械仕掛けの生物を作ってきた。

人間には想像力があるから。

人間には創造力があるから。

たとえば月の海で泳ぐ金魚を作るのだ。

水平線のかなたに地球が浮かんでいる。金魚はまるで地球を目指すように泳いでいた。

「いつか地球に行ってみたい」

ナミはよくそう言った。

「あの青は本物の海なんでしょう。そこで泳いでみたいの」

人間は想像する。ナミは金魚と一緒に泳ぐ様を想像したのだろう。

人間は創造する。地球へ向かう船を。

でも、僕らはもう何も作れない。

材料が尽きたのだ。

僕らはもう作れない。地球へ向かう船も、僕とナミの子供も。

機械仕掛けの動植物は古い物から動かなくなる。

今動いているのは僕とナミが作った物と、僕だけ。

ナミももう動かない。

月の最後の人間が作ったのが機械仕掛けの人間で、僕らはその末裔だ。

人間が存在した証として生まれた僕らは、人間がしたように想像し、創造してきた。

地球へ向かって泳ぐ金魚のあとをついて行く。

人間は想像する。僕もいずれ動かなくなる。この金魚もいずれ。

人間は創造する。僕は地球のように青い金魚を作りたかった。

人間は想像する。

人間は創造する。

もう何も作れない僕は、最後の人間になれただろうか。

投稿時刻 : 2013.08.18 12:36

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.846

アルキメガデテルスく語りき

太友 豪

これは、金魚の口から浮き上がった泡が、水面ではじけたときに聞こえてきた独り言であります。

いつ生まれたものか、はっきりとはわからない。ただ穏やかで温かい水の中で何匹かの仲間達と一緒にまろび出たことは何となく覚えている。個性というものは生まれてすぐに現れるもので、卵からするりと上手に抜け出るものもいる一方で、いつまでも帽子のようにからの一部を頭の上に乗せているものもあった。残念ながら、わたしはどちらかといえば後者の方であった。

この世に生まれ出でたばかりの頃のわたしには、ものを食べるための口というものがなかった。口であるはずの場所についているのは、呼吸をするためえらに水を送る管といった案配だ。

天の配剤というべきか。食べるための口のない代わり、わたしのおなかのあたりにじんわりと暖かい袋のようなものがついてた。その中身を栄養として体を作り上げていた。時間という感覚もなく何となくじっとしているうちに気がつけば自分の意思でぱくぱくと開閉できる口ができあがっていた。

次第にはっきりと周囲を認識できるようになっていると、驚愕すべき事実がわかってきた。わたしの兄弟の中で比較的早く卵から生まれ出でた、体の大きな兄とも呼ぶべき存在が、まだ弱々しい兄弟達を食っているのだ。

恐ろしいことだ。生きている以上、自分以外の命を盗まなくては生きていけない。動物だろうと植物だろうと。それでも、兄弟を殺して食うなどと、なんと浅ましい。冷血、畜生道などというが、わたしのような魚の仲間はいくつも深い業をおわされている。悲しい悲しい。次に生まれ変わったら素数ゼミになりたい。

すくなくとも自分の兄弟に食い殺されないよう、逃げ回りながらも、わたしは無数のちいさな命を丸呑みし、丸ごと消化してわたしの命をつないだ。ああ、つらかったなあ。

わたしがあまりにも周囲を警戒して目玉をきょろきょろと動かしていたせいなのか。いつの間にかわたしの目は丸みを帯びてきた体から左右にぽんと飛び出てしまった。

そう、気がつけばわたしの体はすっかり大きくなって、ほかの兄弟と比べても見劣りがしないようになっていたのだ。わたしは少しだけ誇らしい気持ちもあって、水をかき分けて悠々と進んでいた。

そこを、湿っていて柔らかな何かに捕まった。そうして、こうしてこの鉢の中にきたというわけだ。

ああ、そうだ。そろそろ食事の時間だと思うのだけれど、そのところ君はどう思う？

投稿時刻 : 2013.08.18 04:10

最終更新 : 2013.08.18 11:06

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.833

華麗に変身！「スーパー金魚君」

豆ヒヨコ

本日は弊社の『スーパー金魚君』につきましてご説明をと、ワタクシ馳せ参じた次第でございます。ああ申し遅れました田中次郎と申します、お名刺を――あっ交換、ではこちらで。……お気遣いありがとうございます、では一口だけ。ごくん。コホン（咳払い）、まあ簡単に申し上げて変身スーツですね。……ええ、ダイエット用品と勘違いされる方も多いんですが、こちらが正真正銘の『金魚君』でございます。

テレビショッピング等でご覧になったことは……そう、それです！ 和金コメット江戸錦らんちゅうピンポンパール、その他30種類以上の金魚からお選びいただけます。ご使用方法は非常に簡単で、背びれ・尾びれ・尻びれ・エラぶたを装着の後にタブレットを服用するだけです。幅10cm未満の金魚に変身後は、自動的に金魚鉢に格納されます……はい？ ええ、ええ、一瞬ですよ。念じて頂くだけで、すぐ人間に逆戻りしちゃいます。気づいたら変身前の服装でストンと立ってましてね、結構びっくりするもんです。からっと乾いてますし床は濡らしません、ご心配なく。……嫌だなァ催眠術なんかじゃありませんよ。「喜びの声」DVD、もう一回見ます？

……そうですね、やはり金魚マニアの方が大半ですかね。好きすぎて金魚そのものになってしまいたいという方々。ほかには……忙しくて旅行もいけないなんてご夫婦が、リゾートがわりに利用されたり。一風変わったダイビングを楽しみたいって理由で、お若い方が大勢で試されたこともありますね。歩けない高齢者のご利用も多いですよ、のびのび泳げて最高だとか。え？ 金魚の姿で忍び込み？

他人の家に気づかれず入る方法として、ってことですか。

……うーん、まあ、全然ないとは申しません。……ああ、旦那様の愛人宅……そうですね、ワタクシ共は別に用途を限定しているわけではありませんから。全てお客様の自己責任ということだけはご了承ください。ただ金魚になるということは「魚になる」ということでね、知能も精神もかなり原始に近づくわけでして。躰は人間に戻っても、心はしばらく「荒ぶる金魚」のままだったりするんですよ。奴らは気に入らない個体をつつき殺したりもしますから……そのへんはご留意いただいたほうが。

……10回分おまとめ買いで。ありがとうございます！ 現金一括でお支払いになりますますがよろしいですか？ では、こちらの同意書にサインを。……いえいえ、形だけの簡単なものですよ。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:59

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.818

末尾：金魚

栗田柚香

娘は鉛筆を置くと、たおやかな手さばきで素早く便箋を三つ折にし、水色の封筒に差し入れた。あらかじめ入れておいた文香の香りが鼻をくすぐる。三枚の文を含んだ封筒はやや膨らみ、指先でつまむと心地よく跳ね返った。娘はしばらく封筒の滴るような空色の輝きを見つめていたが、やおら立ち上がり、木戸をからりと開けて庭へ出た。朝霧がまだ濃く立ち籠めており、草履をつっかけた足先から冷たさが染みこんでくる。肩をこすった南天の梢から雫が跳ね上がり宙に舞った。両手には水色の封筒をしっかりと捧げ持っている。

表通りへと続く柵に手をかけたところで、ふと、書き損じを改めていなかったことが引っかけた。ままよと一旦は一步踏み出したものの、やはり思い直して、井戸端に腰掛けると封筒から便箋を取り出した。

とり急ぎ申し上げます

貴方が米国に往かれるとのことのお知らせ、母も私も大変驚きました。母は、昔宅の庭で走り回っていたあの小僧が大層偉くなったことがひどく誇らしいのです。けれど私の胸の内に燃えていたものは、そんなものではありませんでした。

(中略)

長々と昔語りなどしてしまいました。今この胸を焦がしている情熱を、貴方は何と名づけますか。私はこれを、愛と呼びたいのです。サフォー女史が愛ゆえに崖から身を投げたなら、私は貴方のために太平洋へ飛び込んでも構わないと思うのです。私は貴方に冷たかったでしょう。思いやりのない女と思われたことでしょう。けれど、今の私は違います。道端の物乞いに跪きたい、女中部屋で皿磨きもしてみたいようなのです。私は貴方がよく言う情熱を馬鹿にしておりましたが、撤回いたします。これで私も、貴方に、人間らしいと言ってもらえるのでしょうか。

かしこ

娘は文を静かに読み下すと、それを膝のうえに置き、白々とした空を見上げた。まだ朝日は山裾の庭にまで届いていなかったが、娘の胸の内は、五月晴れの下にるように冴え冴えとしていた。科学者の計算のように明解で、盆踊りの直後のように満足していた。そして、彼女はそれだけで十分だったのだ。

娘は音もなく立ち上がる。今度はゆっくりと便箋を折りたたみ、水色の封筒に元通りしまう。そして閉じた封を二本の指でつまみ上げ、鯉に餌をやるような手つきで井戸の中へ放った。

暗い井戸の底で、赤い血沫が散る。白檀の香りを閉じ込めた三匹の赤い金魚が、墨を溶かしたような水面に舞い、くるくると回って、やがて消えていった。

投稿時刻 : 2013.08.18 12:39

最終更新 : 2013.08.18 12:58

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.786

移住

6de 梨

身をくねらせて逃げる。長く尾を引く紅。手を伸ばし、尾の先端を掴んだが千切れた。優雅な曲線だった筈が、破れて惨めな羽衣。痛々しさに罪悪感が募った。それでもおれは捕まえねばならなかった。この水はもう終わりなのだ。早く移住しなければならない。どれほど生ぬるい安住の現在であっても、未来の死は切迫していた。待て、逃げるな。だが彼女は白い腹を眩しくうねらせ、愛らしい口から気泡を吐きながら、泳ぎをやめない。この広い立方体の中で、最高の運動能力を発揮して、追隨を許さない。正直おれはもうしんどかった。トップスピードも機動性も彼女に劣り、疲労も蓄積している。しかも最後の跳躍のための力だけは温存しておかなければならない。もはや傷付けずに捕獲することは不可能だ。麻酔銃も縄も素手ですら、あの柔らかく繊細な肌を無傷で済ますことはできないだろう。どうすればうまく捕えられるだろうか。水が徐々に虹色に変わってきた。汚染の兆候だ。彼女だって気づいている筈だ、そろそろ呼吸が苦しくなり始めてきたことに。気のせいだろうか、彼女の深紅が若干青みを帯びてきたようにも見える。チアノーゼではないだろうか。彼女の優美な睫毛が苦しそうに震えている。おれに身を委ねさえすれば安全な場所に遷してあげられるのに、なぜ信じてはくれないのか。たおやかな長い鰭をおれの首に巻き付け絡み付かせればそれで済むのに。そうすれば全く傷を付けずに彼女を現槽から新槽へと一瞬のうちに跳躍できるのだ。どうやらおれを捕食者だと考えているらしい。ならばとおれは思い当たった。むしろおれが彼女の餌であると思い込ませればいいのだ。時間も力も殆ど残っていない。ほかに方法はない。おれはナイフで自分の脇腹を抉った。激痛。麻酔銃を最弱に調整して、傷に撃ち込んだ。これで暫くは保つだろう。彼女の体色にも劣らない真紅の幕がおれの周りに拡がった。おれは腸を自分の体長の二倍程度まで引き出した。彼女の安心できる距離感の筈だ。見ろ、彼女が急旋回し、おれのはらわためがけて食いついた。案外獰猛な表情をしている。最初に一咬みした瞬間彼女の瞳に走った恍惚の閃光を、おれは見逃さなかった。が歓喜に浸る余裕はない。おれは腸を彼女に巻き付けて柔らかく捕えた。食い千切ろうとする彼女。しかし、跳躍には充分な一瞬を稼げた。おれは跳んだ。新槽に着水した瞬間、彼女はおれの腸の一部を啜えたまま水底へと消えた。

おとなになるまで

塩中吉里

外まであとすこしというところで、エリコは捕まった。

「待ちなさい、きみ」

黒服の男はエリコからジェラルミンケースを取り上げて、中を検めはじめた。こどものエリコでも運べる小型のケースを、男は片手のヒラで支えて、もう片方の手で器用にフタを開けている。

「これは、虫？」

ケースから人工虫たちが入った試験管が引き出される。エリコの育てた虫たちは光に弱い。ケースから出されたかれらの寿命は短く、末路は近い。色鮮やかな線虫がガラスの中で身をねじるようにくねらせて、最後の力で試験管の口から飛び出した。黒服の男は、至極冷静に、手の甲にすがりついていた虫を潰した。「きみ、中央研究小学の制服じゃないか。ホーム一番の秀才が、こんなものを外に持ち出して、どうするつもりだったの」

ぬめった指を黒服になすりつけて、男がたずねてくる。外、というのは、エリコがくらしているホームの境界の外側を指している。ホームから放逐された人々と、飢えた野生の金魚がうろつく悪徳の地。エリコたちの文明が金魚にすくわれた日からずっと続いている世界の在り方だ。

ある日突然、ほんとうに突然に、エリコたちの先祖は、金魚にすくわれてしまった。それはかつて先祖が娯楽のため金魚をすくいすぎたためだとか、全ての獣に宿る精霊の恨みがたまたま金魚を代行者にしたからだとか、脳科学者が秘密裏に施した論理転換の実験が上手くいきすぎたためだとか、原因はさまざまに議論されていたが、とにかく、そうってしまった。エリコたちは唯一安全な、ホームと呼ばれる狭い土地に、互いの場所を奪い合うようにしてすみついている。外が金魚の捕食場ならば、ホームは養殖場だ。直ぐに食べられることはないが、増えすぎたら間引きで外に放出される。犯罪を犯すか、そうでなければ歳をとった者から順に。

「わたし、持ち出すつもりなんてなかったわ、おじさん」

エリコが答えると、男は不思議そうな顔で、フタの空いたケースと、手の甲の潰れた虫と、エリコの顔を眺めた。エリコは高らかに笑うとその場から身を翻して駆け去った。

おじさん、いくつ？ わたしは十二歳。その虫、お腹に卵がたっぷり入っているの。光に当たると、死を予感して、近くのものに産みつける。おじさん、あと何年で外に行く？ わたしがおとなになるまでに、外に行って、金魚に食べられて、あいつらに病気をたくさんうつしてちょうだいネ。金魚のいない、きれいな世界。おねがいよ。

投稿時刻 : 2013.08.17 20:27

最終更新 : 2013.08.17 21:26

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.750

御祭り金魚の里帰り

晴海まどか

「金魚がいる」

いつの間にか、彼女が隣に立っていました。神社の参道に立ち並ぶ屋台の中に金魚すくいがあるのかと思いましたが、彼女が指さしたのはその屋台街の上でした。

日が暮れて辺りはすっかり暗くなりました。いつもなら肉眼でもはっきりと見える夏の大三角形が、提灯や裸電球が煌々としている祭りの中ではよく見えません。夜になると近づいてくるはずの宇宙が、ほんの少し遠のいた感じがします。行き交う人のにぎやかさで空気は熱を含み、僕の額からは汗が流れました。「空に金魚がいるの？」

訊き返すと、彼女は首をのけぞらせて空を見上げたまま頷きました。ふわふわした白いレースのような帯が、ゆらっと揺れます。彼女の浴衣の模様は何かに似ていたのですが、どうしても思い出せません。

「すごく、いっぱいいる」

何かを数えるように頭をゆらゆらさせた彼女に訊いてみます。出目金はある？ あまりいない、出目金は高いから。高いとしないの？

「あそこにいるの、死んじゃった金魚すくいの金魚だから」

僕も彼女と同じように、頭をかくんと後ろにやって空を見上げました。

「マグロの群れみたいに、ぐるぐる泳いでる」

「マグロの群れ、見たことあるの？」

「テレビで見た。知ってる？ マグロは、泳ぎ続けないと窒息して死んじゃうんだよ」

それはいい。何がいの？

「自分で好きなときに死ねるから」

彼女はゆっくりと瞬きしました。大きな目に祭りの明かりが映り込みます。

「私にはよくわからないな」

首が痛くなってきて、僕は頭を戻しました。彼女は飽きずに夜空を見つめ続けています。

「死んじゃった金魚が、なんでそこで泳いでいるのかな？」

「お盆だから」

どうせお盆に化けて出るなら、飼い主のところに行けばいいのに。

「金魚すくいの金魚はすぐに死んじゃうから、飼い主を覚えてないんだよ」

「そうなの？」

彼女はその顔を初めて僕に向けました。その頬がぷうっと膨れます。

「君がそう言ったのに」

「そうだったね」

金魚すくいの金魚は弱い、と言われることがありますが、実際は金魚をすくった側の問題で死んでしまうことが多いのです。金魚が入った袋を長時間持ち歩いたり、カルキの抜けていない水道水にそのまま入れてしまったり。

「でも、私は覚えてる。君が大事に私を飼ってくれたから、ここに来たよ」

彼女の体が、しゅるっと小さくなりました。またね、と呟いた小さな金魚は、祭りの明かりに溶けるように輝き、夏の夜空に消えていきました。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:59

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.727

キンギョソウ

永坂暖日

「どうぞお幸せに」

かつての恋人が、結婚のお祝いとしてくれたのはキンギョソウだった。

鉢植えの淡い桃色の花を見て、新妻は「綺麗な色」と言った。

私とかつての恋人が別れたのは、妻と出会うよりも前のことで、円満な別れ方だった。

結婚をしたと知らせる葉書を知人たちに一斉に送り、その中にかつての恋人も含まれていた。かつての恋人とは思いついたように、他愛もないメールのやり取りをすることがあったから、葉書を送ったのである。

かつての恋人から特段の連絡はなく、葉書を出してしばらく経った頃、前置きもなくキンギョソウが送られてきた。

カードに一言だけ綴られた見覚えのある字を見て、懐かしい気持ちになったのは妻には秘密である。

広がる花卉は金魚そのものだった。

「本当に金魚みたいね」

贈られてきた直後はつぼみが多かったものの、今はほころんでいるものの方が多く、金魚が群れをなして泳いでいるようだった。

世話をしているのは主に妻で、彼女はキンギョソウが私の昔の恋人から贈られたものと知っても、拘りがないようだった。

「もうずっと昔に別れた人なんですよ」

だったら関係ないわよ綺麗な花はなおさらね、と朗らかに言う妻の心の広さに感心すると共に少しは嫉妬くらいしてほしいなと苦笑いした。

私の過去にこだわりを持たない妻はキンギョソウが気に入ったらしく毎日甲斐甲斐しく世話をしていたが、いくら世話をしようとも花が枯れるのは避けられない。

かつては群れをなして泳いでいた桃色の金魚たちは、日に日にしおれていった。

妻はそれを惜しみながらも、種を取って植えるのだと張り切っていた。

私は、そんな妻とは対照的に、あまりキンギョソウに関心がなかった。なるほど、綺麗ではある。しかし、それ以上愛でようという心持ちにはならず、どちらかと言えばキンギョソウの世話を楽しそうにする妻を見るのが楽しかった。

やがて花はすべて枯れたが、こんなに種子が取れたと妻は嬉しそうだった。

「でも、花は綺麗なのに、さやはちょっと不気味なのね」

妻に言われ、私は久しぶりにキングヨソウをまじまじと見た。なるほど、髑髏のようだ。可憐な花の姿を覚えているだけに、禍々しくさえある。

――貴方はわたしの外見しか見ていないのね。

かつて、恋人にそう言われたことをふと思い出した。

小さな三つの虚ろが、かつての恋人の顔と重なる。

――だから、別れたいんでしょう？

それは、事故で二目と見られなくなった、あの顔と。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:01

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.714

《シリーズ作品賞》

世界遺産シリーズ1 狂王からの贈り物はこちら

世界遺産シリーズ2 人間ポンプ、長城をゆく

しゃん

源吉の目の前には、ふたつの壁がうねりながら延々と伸びていた。
壁と壁の間が道であり、多くの観光客が歩いている。
思ったよりも急な坂道だった。
齢八十を迎える源吉には、一步進むのも、ぬかるに足を取られたような重たさだ。

万里の長城を制覇する。
源吉はふとそう思い立ち、中国へとやって来た。
無論きっかけはある。
息子の隆一の羽振りがいい。
風の噂では、金魚すくいのアプリとやらで一山当てたという。
些細な衝突がもとで袂を分かっているのに、詳しいことは分からない。
が、無性に腹が立つ。
そもそも、金魚すくいのアプリとは何なのか。
自分も世田谷食品からグルコサミンのアプリを取り寄せているが、アプリは飲むものであって、すくうものではない。
ましてや、金魚などとは、自分への当てつけとしか思えない。

源吉はかつて、日本では知らぬ者のいないほどの有名人だった。
金魚を飲み込み、また吐きだす一発芸で一世を風靡し、人間ポンプと話題になった。
テレビにも出たし、毎日イベントに呼ばれ、全国を駆け回った。
が、それも束の間。
今では、ただの老いぼれだ。
なまじ身体が丈夫なだけに、棺桶に入るタイミングを逸している自分が恨めしい。

それでも、源吉にとっての誇りは人間ポンプしかない。

ただ問題なのは、朽ちつつある自分の体力だ。
果たして、再び金魚を吐きだすことができるのか。
息子の噂を耳にした時、源吉は己に問い掛けた。
きっと無理だ、金魚はおそらく俺の夕飯になってしまうにちがいない。

人間ポンプの源吉。
あくまでそう呼ばれつつ、この世を去りたかった。
万里の長城を訪れたのには、それを確かめる目的がある。
月からも見えるこの建造物を、端から端まで歩き倒す。
それができれば心肺機能が高められ、無駄に金魚を殺すこともないだろう。

そうして源吉は来る日も来る日も、長城を歩きつづけた。
足にはマメができ、景観を愛でる余裕さえない。
いい加減、日本に帰ろうか。
そう思った矢先、源吉は壁に穴を見つけた。
覗いてみれば、中は大岩がそびえる密林で、浅黒い肌の男が一人いる。
男は、かつて父を殺した狂気の王。
その出来事が、男を蝕みつづけている。
疲労から来る幻覚のようだったが、源吉は不思議と男が深く嘆いていることを知った。

あいつも、胸に溜め込んでいるものがあるのだろう。
人間ポンプの息子の癖に、吐きだすのが下手ではシャレにならない。
苦笑いをし、来た道に戻る。
振り返ると、穴はきれいに消えていた。

投稿時刻 : 2013.08.18 00:22

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.706

電気金魚の夢を見るのは誰か？

茶屋

データ空間から逃げ出した金魚たちが世界に広がってからどれほどの年月が経ってしまったのだろう。はじめは飼育ゲームや装飾アプリケーションに付随したプログラムに過ぎなかった。けれどもそれは実際の生き物である金魚たちが愛好家たちに品種改良されていったのと同じように、物好きなギークたちによって改良されていった。よりリアルに、より綺麗に、より多機能に、より知的に。ギーク達によって付け加えられていったデータは膨大なものとなり、いつしか根本的な改良、プログラムの洗練は後回しになり、付け足しばかりが頻繁に行われるようになった。それはもはや一個人が容易に解析できるものではなくなり、所々にブラックボックス部分ができはじめた。ブラックボックスはパンドラボックスへと変貌を遂げていったが、誰もがそれを見て見ぬふりをした。そして、連続性は断絶し、特異点を発生する。金魚たちは自らの意思を持つかのようにネットワーク上に飛び出し、その頃には一般に普及していた拡張現実や仮想現実の世界へと分布を広げたのである。

(以下略)

(引用文献：弥富雅治 「電子金魚の行方」 極東サイエンス 3月号 p.42)

ふわふわと空に浮かぶ金魚たちを長洲絹子はぼんやりと眺めていた。ゆうゆうと泳ぐ金魚たちが羨ましいと思った。何も考えたくはないが、つつい仕事の事を考えてしまう。視覚デバイスをオフにしても金魚が見えるという症状を訴える患者が多くなってきた。精神疾患の一種と思われるが、現在知られているどの疾患とも類似性はなく、患者たちの症状はただ一つ、金魚が見えるということだけである。確かに金魚は日常的光景の一つで視覚デバイスをつけている限り逃れることが出来ない存在である。ほとんどの人間が一日中視覚デバイスをオンラインしている現在では金魚を見ない時など殆ど無いと言っても過言ではない。そんな状況が生み出した病気なのだろうか。そんな日常に合わせるために脳が現実の情景を作り替えてしまったとでも言うのだろうか。人間の脳に、金魚が住み着いてしまったとでも？

そこでふと思い出す。先ほど、気分転換に視覚デバイスをオフにしたことを。

電子の波を泳ぐ金魚。

電子達が見る夢の金魚たち。

電気信号の流れ。

ニューロン。

金魚たちは泳ぐ。

そこに流れがある限り。

金魚たちは踊る。自らのパターンを人間の脳に埋め込むために。

人間の脳に分布を広げるために。

新たな電子の世界に乗り込むために。

投稿時刻 : 2013.08.18 11:55

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.643

金魚の誘惑

栗田柚香

漁師の吾作は、都会から来た身なりの良い紳士と 2 人で船を出した。紳士は樽くらいの大きさの箱眼鏡を持っており、船が十分沖に出ると、紳士は箱眼鏡を水面に下ろしてしげしげと海中を観察しはじめた。

「そんなにいいものが見えますか」

「ああ、実に見事だよ。ねえ君、あそこに見える輝きは何かな、あれが珊瑚ってやつなのかい？」

「この海に珊瑚なんてねえですよ」と言いつつ吾作は腰を上げると、水面にプカプカ浮かぶ箱眼鏡を受け取って覗きこんだ。よく磨かれた硝子板の向こう側は緑がかった暗闇だけだったが、時折、銀色の細いものが視界を横切った。吾作が目をこらしていると、

「もっとよく見てみたまえ」という声が頭上からして、そのまま背中を強く押され甲板から足が浮き頭から真っ逆さまに水中に落ちた。

袖を引く者がいる。吾作は手足をばたつかせながら、どうにか片手で箱眼鏡の持手を掴みもう一方の手で誰かの腕にしがみつき、そっと目を開ける。

途端に極彩の世界が目射った。彼らがいるのは、途方もなく巨大な金魚鉢の中であり、周りにはありとあらゆる種類と形の金魚が大群をなして、水流に運ばれながら儚げな姿態を震わせていた。上からも下からも眩しいサーチライトが絶え間なく向きを変えながら水中を舐めまわし金魚たちの乱舞を照らしだした。「ほら、御覧なさい。これが海の美しさですよ」傍らの紳士が言った。

「海なんかじゃねえ」吾作は金切り声で叫んだ。「海はこんなに明るくない、こんなにどぎついもんじゃねえ。そうだよ」吾作は足にまとわりつく金魚を振り払いながら「海に金魚はいねえんだから」

「でも、美しいでしょう。美しいと評されるには、これくらいの狂乱がなくては。貴方方の子供達は、そうあれかしと望むのですよ」

黄色いサーチライトが横切り、紳士の姿を照らしだした。そこには、頭は金魚、身体は人間、手先はヒレという、ぞっとするような生き物が佇んでいて、銀色に縁取られた黒塗りの目玉でじっと彼を見つめていた。吾作の視線に気がつく、分厚い下唇をパクリと開けて何度か動かした。水槽に注ぎ込まれた餌に食らいつく金魚の口元そっくりに。

陸に帰った吾作の話信じるものはいなかった。海のお化けとはいえ、人魚でも海坊主でもない、あんまりにグロテスクだと言うのだった。けれど彼の息子は、それから数年経って船底を掃除している時、側面にブリキの金魚が打ち付けられた箱眼鏡を見つけたのだった。

投稿時刻 : 2013.08.18 00:49

最終更新 : 2013.08.18 03:04

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.643

ミス・ゴールドフィッシュ

豆ヒヨコ

「栄えある『ミス・金魚娘』は……海藤ミチルさんに決定しました！」

歓声と拍手が起こる。ミチルは、おっとりとパイプ椅子から腰をあげた。あたしはそっぽを向き、そんなん分かってたしとつぶやいた。勿論負け惜しみ。

「やはり美しいですねえ。おめでとうっ」

でかい蝶ネクタイをした司会者が、一抱えほどもあるトロフィーを手渡した。和金が踊るクラシックな浴衣で、ミチルはにっこり感謝の笑みをこぼす。会場からため息が漏れ、審査員たちはしまりなく笑った。「馬鹿ばっかりだよ」

恨みを込めて、あたしは再びつぶやく。

ミニ丈の浴衣は、ピンクのランチュウが泳ぐ超・素敵なやつを新調した。かつてない高さに茶髪を盛ったし、カラコンもつけま（つけ）も、メイクだって完璧に仕上げた……のに駄目だった。ふと魔がさす。

「あいつ、本当は男ですよ！ 地声はすごい低いんです！」

あらんかぎり叫んでやろうかとニヤつく。選んだおじさんたち、100 %気づいてないだろう。一方で、そんなことに何の意味もないと知っていた。ミチルには、賞金もトロフィーも全然重要じゃない。奴は試してみただけなのだ、自分が”女として”どこまで通用するかを。

かなわないことは、幼馴染のあたしが一番よく分かってる。それでも全力を尽くすべきだと思った。芸能界を目指す誓った、ライバル同士だからだ。

「ミスと準ミス、検討をたたえる握手をお願いします」

意味不明な儀式は続く。ミチルが目の前に立っていた。かんざしでまとめた黒髪が艶やかに眩しく、あたしは地面に目を落とした。突然、すごい力で腕をつかみあげられた。低く野太い声が降る。

「グジグジしてんな」

驚いて顔を上げると、観音様のような笑顔があった。久しぶりに会う、男のミチルだ。

「ちゃんと後ろ、ついてこいや」

荒っぽいけれど、優しさにあふれた言葉。蝶ネクタイの司会が、空耳かと目を白黒させた。あたしは反射的に「うるせえよ」と怒鳴る。その意気だとも言うように、彼女はまたニヤリと笑う。

未だかつてないエネルギーが、ふいに心の底から湧いてくる。

悔しい、悔しい悔しい。あたしはこんなところでは終わらない、ちゃちなミスコンなんかで打ちのめされ

たりはしない。必ず後悔させてみせるから覚えとけ。とりわけ開催委員長のバーコード禿、首洗って待ってけよ！

あたしは挑むように、ミチルを強く見返す。

彼女はしとやかに背筋を伸ばし、小悪魔な裏声で「がんばってね」と囁いた。

投稿時刻 : 2013.08.18 01:19

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.625

アナカリスになりたい

晴海まどか

「キングヨモって知ってる？」

ファミレスでの少し遅いランチタイム。そこでの突然の問いだった。

「ギョモ？」

「違う違う、き・ん・ぎょ・も。金魚の水槽に入れる水草のこと」

「ああ……金魚の藻？」

「そう、藻」

モモモ、と歌のフレーズを口ずさむように言って、彼女は笑んだ。

「そのモモモがどうしたんだよ」

「金魚藻っていうのは正式名称じゃないの。水草の一般名称で、アナカリスとかマツモとかっていう、色々な水草のことをさすの」

彼女が突然こういうことを言い出すのは珍しくなかった。彼女は引っ込み思案な分、俺よりもたくさん本を読むし、世の中の色々なことに詳しい。

「でも、アナカリスって言っても水草に詳しくない人にはよくわからないでしょ？」

そうだな。ズズズ、とドリンクバーのコーラをストローですする。

「金魚の水槽に入ってる水草だって説明して、初めてイメージが沸くでしょ？」

彼女の性格からして、なんとなく言いたいことがわかってきた。

「お前、そのアナカリスって草に同情でもしてるわけ？」

同情じゃないんだけど。彼女は言葉を選ぶように視線を泳がせる。

「この間、みっちゃんにメールしたの。マサくんにアドレス教えてもらったからさ」

みっちゃんというのは、俺が親しくしているグループの女友だちの一人だ。地方出身でこっちに親しい友人があまりいないという彼女に、俺は自分の友人たちを積極的に紹介するようにしていた。

「そしたら、『誰ですか？』って返事がきて」

「お前、名乗らなかったの？」

名乗ったよ。彼女はふくれた。

「だから『マサくんの彼女です』って返信したの。そしたら『なあんだ』って」

よかったな。とコーラの残りを飲み干したら、よくないよ！ と思いのほか強い口調で反論された。

「私、気づいたの。あそこでは私は『マサくんの彼女』でしかないんだなって」

「だってそれ、事実だろ」

事実だけど。彼女は言葉を続ける。

「私、それじゃ嫌だ」

なんだか雲行きが怪しくなってきた。

「じゃ、ちゃんと自己紹介しろよ」

「したよ。でも同じ。だってマサくんも、そういう風にしか私のこと扱わないじゃない」

そうだったんだろうか。わからない。

「マサくんが金魚で、私は金魚藻なんだよ」

彼女はそこまで言って一呼吸つくと、笑った。

「私、アナカリスになりたい」

彼女は知っているんだろうか。水を浄化する役割もある金魚藻が、金魚の飼育には不可欠であることを。

啜っていたストローを、俺はゆっくりと噛んだ。

投稿時刻 : 2013.08.17 16:08

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.625

《てきすとぽい杯賞》

赤い魚

茶屋

昼寝をしていた娘が急に泣きだした。

なだめて再び寝かしつけようとするが、怯えた様子で「赤いお魚がいる」と繰り返すのである。

怖い夢でも見たのだろうと「金魚さんかな？」と問いかけても、首を横に振るばかりで一向に要領を得ない。

金魚でなければ、鯛だろうか。それとも赤い笠子とか。

どれを想像してみても、牧歌的で、あまり悪夢という感じではない。

鮫や鯨のような大きな魚ならば怖いという印象もあるだろうが、思い浮かぶ赤い魚はどれも大きくないものばかりだ。

ともかく、娘はまた寝てくれそうもない。一人で遊んでいてくれるならばそれでも良いのだが、私が娘のそばを離れるのを許してくれない。仕方なく玩具で遊ぶように促してやるのだが、それでも娘は心ここにあらずといった様子で時折する物音に怯えている。

「大丈夫。もうどこかに行っちゃたよ」

そう安心させようとしても娘が安心した様子はない。よっぽど怖い夢を見たのだろう。

私も子供の頃は魚が苦手だったような気がする。魚と言っても鮮魚店で並べている死んだ魚である。

死んだ魚の、目が怖かった。その目は何も捉えていないはずなのに、ずっとみられているような感覚。深い闇の中に取り込まれるような感覚。

暗い台所。

母の背中。

トン。

魚の首を落とす包丁の音。

ギチ。

うまく切れず、力を入れて無理やり切り落とそうするときの音。

死んだ魚の目。

死んだ目の母。

ふと我に返ると日は傾きかけてきた。

娘もやっと赤い魚のことから頭が離れた様子で人形に何やら話しかけている。

ほっとして立ち上がろうとしたが、どうも娘の様子に違和感を感じた。

「あかいあかいあかいあかいあかいあかいあかい」

娘は人形の顔を赤いクレヨンで塗りたくっていた。

「何やってるんだ」

思わず娘の肩をつかむ。

娘が振り返った。

娘の目は死んだ魚の目をしていて。

「あかい おさかな」

娘が私の背後をゆっくりと指さした。

赤い魚がいた。

でも、魚じゃない。

頭だ。

真っ赤な血に染まり、ところどころ乱暴に食いちぎられたかのように肉がはみ出して見える。

顔全体が真っ赤に染まる中、目だけがその色を残している。

首から垂れ下がった脊椎を尾びれのように動かし、じっとこちらを見ている。

死んだ魚の目で。

「ボオァァァァ」

その声は赤い首が発したのか、それとも私の絶叫だったのだろうか。

気がついてみれば、私は畳の上で寝ていた。

夢だったのかもしれない。

だが、今でも時折、視界に赤い魚がよぎることがある。

投稿時刻 : 2013.08.17 17:44

最終更新 : 2013.08.18 05:58

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.615

今日も食らう

コユキ キミ

にんにくをみじん切りにして、鍋にほおりこんだ。たらたらと油をたらす。いい匂いがしてきた。さてどうやって食すか。もともと食用ではないので、骨が多いし、うまいものではない。処理は考えずに、包丁をふるい頭をおとして、ぶつ切りにする。

スープかな。スープにしておけばとりあえず大丈夫だろう。

さらに青ネギとショウガをみじん切りにして鍋にほおりこんだ。木じゃくしで炒める。そこにぶつ切りにしたソレをほおりこんだ。最近よく出回っているのだが、彼はあまり好きではない。骨が多い。肉がくさい。食べづらい。内臓を食べるのが好きだと、彼女は言っていたっけ。彼は身震いする。

内臓は苦くて嫌いだ。気持ち悪い。

「それより美味しいのは頭部のみそよ」

彼女はそう言っていたっけ。そんなものをたべるなんてとありえない思う。味覚だけは彼女とあわない。

スープが煮立ってきた。すこし辛くしよう。

豆板醤とごま油と中華スープのもとをスープに混ぜ合わせる。

味付けをする。辛くしておけば彼女は「美味しい」というだろう。

さて、あともう一品。食材のなかから、味付けの濃い大きなソーセージをとりだした。香辛料やら保存料やら着色料やらで、どんな肉が加工されているかわかったもんじゃない。それを裂いて、野菜を添える。

さっきのスープとあわせてテーブルにいそいそとセッティング。いいじゃーん。

ぴちゃんという音がして、彼女がやってきた。彼女は頭のうえのコブが魅力的だ。鱗がぬめぬめと真黒なところも大好きだ。

彼は自身の体色をみる。ありふれた白と朱色の鱗。うんざりする。

「いやーん。また『ほもさび』？」

「好きだっていったじゃないか。そういう事を言うなら食べなくていいよ」

「だって、最近『ほもさび』ばかりだし」

彼の不機嫌を見て、あわてたように彼女は魅力的に胸びれを震わせる。ちろりとコブの下をつぶれかかった目をこちらに這わせてくる。

「でも、あなたが作ってくれるなら、なんでも好きよ」

黒いコブも震えている。

まあ、いいか。彼は彼女のみえみえのお愛想にのることにする。

はらも減ったし食事にしよう。彼は進化した胸びれをのばすとスプーン状のものをとった。尻尾は水につけたまま、テーブルについた。食材のことは反省する。

しかし、どうして頭のいい人は『ほもさび』を矮小化して、家畜にしようだなんて思ったのかな？ 鱗がない家畜なんて気持ち悪いじゃないか。

彼女とテーブルにつく。

今日も食らう。

投稿時刻 : 2013.08.18 10:12

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.615

《夏の大三角賞》
乾いた海と光る鱗
碧

それは、日の光を受けてきらきらと輝いていた。あまりに小さかったから、肉眼でその存在を捉えられたのは僕だけだったと思う。自警団の目を盗んで駆け寄り、手にとった。平べったい、いびつな丸型の無機物だった。僕はそれを握り締めて、物知りなお兄さんの下へ向かった。

物知りなお兄さんは、コロニーから離れた洞穴にひっそり住んでいる。物知りなお兄さんは、物知りだから物知りなお兄さんと僕が呼んでいる。お兄さんなのかどうかは実はよくわからない。もしかしたらお兄さんの生まれ故郷では男とか女とかいう区別をしないのかもしれない。お兄さんは物知りな上に異形だからこの星に流されてきたらしい。

僕はこの流刑星で生まれ育った。流人5世ってやつだ。

「お兄さん、これ見て！」

拾ってきたお宝をお兄さんに見せると、お兄さんは珍しく驚いたような顔をした。

「この前ロケットが墜落した場所でこっそり拾ってきたんだ」

「君、私が自警団に監視されているのは知ってるだろう。どうして持ってきたりしたんだい」

「僕が拾ったんだから、誰にも渡さないよ。これが何か教えてほしかったんだ」

お兄さんはしばらくそれをじっと見つめた後、教えてくれた。

「これは多分、墜落したロケットに実験用に積まれていた魚の鱗の一部だよ。名前は――君の使う言語では表現しづらいな」

「この星に海がないから死んじゃったの」

「いや、海の魚じゃないんだ。それにどのみち死んでいたよ」

その魚は太陽系第3惑星の知的生命体が観賞用に造り出した魚で、赤かったり、黒かったり、たまには白かったりして、ひれや尻尾が大きく、透き通ってひらひらしているのがとても美しいらしい。

「お兄さんも見たことあるの？」

「大昔に資料でね。生で見たことはないよ。魚の鱗を手取るのも初めてだ」

「これは黒だったのかな？」

「いや、焼けてしまったら元の色はわからない。私が昔見たのは赤だったな」

僕はそれを聞いて洞穴を飛び出した。この星の大地は赤茶けている。理由は知らない。開拓されたコロニー以外はどこも赤い砂で覆われている。僕は拾った魚の鱗に赤い砂を目一杯かぶせた。きらきら輝いて

いた鱗は砂の海に沈んでいった。

「お前、こんな遠いところで、色まで失って、可愛そうだったね。寂しいね」

僕は人差し指で砂の上に海の絵を書いた。お兄さんが教えてくれた情報を元に想像して。それから、僕が決して行くことのできない他の星の様々な生命に思いを巡らせた。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:52

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.583

最後に見たのは

工藤伸一@ワサラー団

地面に転がり口をパクパクさせて痙攣している哀れな金魚の姿にうなされて、目が覚めた。部屋が真っ暗なので置き時計を確認すると、深夜 1 時だ。金魚には何の思い入れもなく、どうしてそんな夢を視たのか見当も付かない。とりあえず最後に金魚を見たのはいつだったか記憶を辿ってみると、縁日の夜に金魚すくいので手に入れた獲物をビニール袋に入れて歩いていた少年のことを思い出した。

たいへん混雑していたため、通行人の持っていた何か鋭利なものが刺さったらしく、ビニール袋が破れて地面に落ちたのだ。何が起きたのか気付くなり少年と一緒にいた父親に助けを求めたから、わざわざ他人の僕が手を貸す必要はないと思い、金魚を踏まぬよう気を付けながら彼らの横を通り過ぎた。

金魚が無事だったか心配ではあったものの、その程度のことで夢にまで出てくとは思えない。しかもそれは何年も前のことだ。多分その後にも似たような状況があったに違いない。水でも飲んで頭を冷やせば思い出せるだろうとキッチンに向かおうとしたら、どうも部屋の中の様子が違う。寝室の外には廊下があり、その奥に見えるリビングの電気が点いたままだ。室内の構造やインテリアは全く違っていて、やはり自宅ではない。

フローリングの床の上で何かが蠢いている。それは金魚だった。最後に見たどころか、今まさに目の前にいるのだ。僕と関わりのある人で金魚を飼っているのは、愛人だけなのを思い出した。彼女はリビングの奥にあるキッチンにいる。近づこうと部屋に足を踏み入れると、床に転がっているのは金魚だけではないことが分かった。

廊下からは死角になっていて見えなかったが、誰かが倒れている。しかも頭から大量の血液を流しながら。顔を覗いてみるとそれは僕自身だった。「どうなっているんだ？」と訊いてみても返事がない。まだ夢の中なのかもしれないと思ったが、キッチンにいる愛人が洗っているものを見て、ようやく記憶が蘇った。デートの後、彼女の部屋で別れ話を切り出したところ、金魚鉢で頭を殴られたのだ。

床にくずおれながら僕は、鉢から放り出され水分を欲してもがき苦しむ金魚を見た。それっきり気を失っていたのだろう。けれどもそれなら、何故さっき寝室にいたのか。それどころか自分で自分の姿が見えて

いるなんて。そこでようやく気付いた。さっきの夢は金魚を最後に見た時の記憶ではなく、人生の最後に見た光景だったのだ。そして全てが途絶えた。

投稿時刻 : 2013.08.17 16:36

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.571

茜色ひとつ

斜芭萌葱

世間から一拍遅れたような頃合いで、その町の夏祭りはやってくる。少女が初めて浴衣を着つけたのは、そんな祭りの夜だった。

鏡の前でくるくる回り、帯が崩れていないかどうか、入念に最後の仕上げをする。金魚の泳ぐ白地の浴衣に、きりりと締めた緋色の帯。練習の成果は出たらしい。

――意外に巧いじゃないの。

祖母に褒められて気を良くし、下駄を鳴らして家を出た。駅前で友達と待ち合わせ。小さな嘘をついたのも、たぶん初めてのことだった。

色とりどりに浴衣の咲く駅前を、少女は顔を俯けて、からころと足早に通り過ぎる。級友に見咎められるのも、来るはずだった少年の姿を眼にするのも、どちらも断じて避けたかった。

林檎飴の屋台の前で、ようやく顔を上げ周りを見る。夜店の連なる商店街は、提灯に照らされて異世界に見えた。

人波に流されるようにして、ぼんやりと屋台を眺めて歩く。綿飴、かき氷、とうもろこし。くじ引き、焼きそば、射的にお面売り。ヨーヨーを弾ませる少年少女が視界に入り、少女は慌てて顔を伏せる。その一瞬に気を抜いたせいか、人の流れから弾かれて、ふらり、一軒の屋台へ押し出される。

――いらっしゃい。

初老の店主は笑顔で迎え、小さな椀を差し出した。見下ろすと大きな池の中に、赤い金魚が泳いでいる。夢見心地で巾着を開き、少女は椀を受け取った。

裾を払ってしゃがみこんでも、隣で覗く人はない。膝を抱えてじっと水を見ると、一緒に泳いでいるような、そんな錯覚に捉われる。

浅い水の中に放たれ、紅い金魚は優雅な曲線をいくつも描く。遠目に見たら大きな器でも、中の彼らにはさぞ狭いだろう。

空の椀を抱えこんだまま、少女はぼうと魚を眺める。ぽちゃん、と傍で跳ねた音を追うと、膝に居たはずの金魚模様が、ひとつ水の中で泳いでいた。瑠璃色の渦だけが中途半端に、浴衣の生地に残される。

思いだしてポイを動かす。浴衣の金魚がどれかわからず、手前を横切った茜に狙いを定めてみたものの、薄紙を破られただけだった。

初老の店主は微笑んで、少女に金魚を一匹掬ってくれた。椀を使えば確かに容易く、綺麗な金魚が掬いとれた。

ビニールに入れられる寸前に、少女は首を横に振った。

――いない。

店主は困ったように微笑んで、袋の一匹を水に放した。一点の茜は紛れて消えた。

遠くで花火が始まった。少女はゆっくりと立ちあがり、人波に飲まれて空を見上げる。花火の音にかき消えながら、紅い鼻緒の下駄が鳴る。

投稿時刻 : 2013.08.18 03:12

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.571

《夏の大三角賞》

ゴールデンフィッシュにうってつけの日

丁史ウイナ

へーいみんなー。魚のなかの魚、魚王、ゴールデンフィッシュ様のおでましやでー。ひゅーひゅー。きゃー金魚様カッコイイ！ 金魚様！ 金魚様！ ってちゃうがな。違うがな。金魚様ってなんやねん。金魚ちゃうわゴールデンフィッシュ様や。世界おさかなグランプリで一等賞をとった魚の王様やで？ 王位継承者なんやで？ それがなんで金魚やねん。金魚とかおクチぱくぱくおメメころころしときーな。金魚の出番ちゃうねんゴールデンフィッシュ様やねん。ほれ見いこのヒレ！ 肉体美！ いかすやろおきてるやろお。この努力どう考えても並ちゃうで。大盛りやで。いや特盛りや！ 特別、出血、大サービスや！ 店たたんでまうわ。つか出血ってなんやねんどっから来てん怖いわーホラーやわースプラッタやわー。いや赤字のことやけどな。きゃー金魚様物知りー！ おおきにおおきに。まーさっき検索したんやけどな。ってちゃうがな。だから違うがな。金魚様ちゃうねんゴールデンフィッシュ様やねん。なに漢字読みしてんねん。そやったらボーリングは弓輪か？ ボーのリングか？ ちゃうやろ？ そやろ？ 万年ガターやろ？ マイノリティーは私の糊茶か？ ガンマンは銃男か？ あっこれはそやな。なんやそうやな。あれ？ じゃあゴールデンフィッシュは金魚なんか？ アレアレ？ 金魚様ー！ わー。金魚様ー！

わーわー。金魚様ー！ あー拍手。はい拍手。そうや金魚か。金魚やったわそういえば。そうやそうや金魚なんや魚の王様は金魚様やねん。ってなんでやねん。あやうく自分見失うところやったやんかちゃうがな。違うがな。金魚ちゃうことくらい知っとるわ。ゴールデンフィッシュ様やゆーとるやろ。なんでみんな金魚様金魚様言うねん。どこの誰やねんそいつは。これはゴールデンフィッシュ様の式典なんやで？

金魚様ちゃうんやで？ 世界おさかなグランプリで一等賞やで。ほら賞状。ゴールデンフィッシュ！ ほれ見い！ ここ見い！ ゴールデンフィッシュって書いてあるやろちゃんと。金魚ちゃうんやでこれ証明やでほら。Golden-fish。なんで英語なのかつちゅーとな、世界おさかなグランプリが、世界規模で開かれたからやねん。世界やもんな。だから英語やねん。共通語やねん。ほら賞状読んだるわ。出身地じゃばん。個体名 Golden-fish。品種名 Wakin。うん？ えーっと検索検索っと。……ワキン金魚やわ。金魚やったわ。うわああ金魚やったわああ。

もうあかん自殺しよ銃男バーン。

投稿時刻 : 2013.08.18 06:45

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.538

さらばデメ太郎、達者でな！

犬子蓮木

夜の海を走っている。軽トラを金魚に牽かせて。運んでいるものが金魚なんだから、こいつらに牽かせればいいという簡単な理屈。

あたしは黒猫のエルと一緒に祭り用の金魚を運んでいる。

そんで浜辺に上陸したら、めそめそした少年がいたんだ。

「何故、泣いていた？」

あたしの肩にぶらさがっていたエルが言う。

「猫がしゃべった」

「この街では猫がしゃべらない？」エルが尋ねる。

この少年はいろいろ混乱したらしい。金魚の運び屋にもしゃべる猫にも会ったこともないんだって。今時、めずらしい子だ。

あたしは指をぱちっと鳴らす。砂浜でぴちぴちしてた金魚たちが飛び上がって、荷台の水槽に入ってしまった。

「金魚を運ぶのに猫はいいの？ 食べちゃわないの？」

「猫が金魚を食べちゃうからエルがいるんだよ」あたしが言う。「話が通じる奴ばっかならいいんだけどね。

話が通じない奴には猫同士で話してもらう」

「この街の猫はおしゃべりできないみたいだしね」エルが言った。

エルが話しかけると少年はぼつぼつ話をしてくれた。

「いじめられてるんだ」

「ああ、そう」

「助けてよ」

なかなかおもしろいことを言う。ただの金魚の運び屋さんに何を期待しているのか。

「ガッコの先生にいいなよ」

「それがいいね」エルも言った。

「だって魔法が使えるじゃん」

「使えないけど」エルが言う。

「金魚」少年が言う。

「あれは魔法じゃない。あたしにできるのは次のお祭りで金魚掬い放題ぐらいかな」

あたしとエルは車の中でぼーっとテレビを見ていた。金魚に牽かせているので運転は放置安定。黒い出目金、デメ太郎を泳がせて、でかい目をカメラ代わりに中継していた。

少年はいじめっこと金魚掬いで勝負することにしたらしい。

「ずるくない？」あたしはエルに言う。

「目的は勝負じゃない」

まあねえ、目的はいじめから逃れること。

「お、少年の番」

というところで映像がぐわわんと動いた。デメ太郎、無関係の人に掬われ、連れてかれる。

「ちょっとー、いいところでしょー」

「結果はわかってる」エルが煮干しを食べながら言った。「これだけでいじめが解決するとも思えないしね」

「エルは冷たい」

「夏に熱いよりはいい。リンゴ飴みたいな静けさが好き」

テレビのスイッチを切った。

「ところでなんで空を飛んでいる？」エルが尋ねた。

「気分、気分」

運んでいるのが金魚なんだから、こいつらに牽かせて飛べばいいっていう簡単な理屈。夜空を飛ぶのは気持ちいいし。

「よーそろー」

投稿時刻 : 2013.08.18 06:31

最終更新 : 2013.08.18 06:33

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.538

落ち無し？（一コマ）

うわああああああ

「金魚、と聞いて何か思い浮かぶものはねえかい」

「や、どんなもんだろうな」

口ひげをいじりながら男が考える。

「そりゃあ、夏祭りってもんじゃないかい」

「そうかあ、金魚すくい」

もう一人の男がぼんと手を叩いてうなづく。

「おう、金魚すくい。まあでも、ちと安易じゃないかい。お前さんは一体・・・」

「いや、特に深い意味はないってことよ。この前ちと子供が手にぶら下げてのを見たもんでよう」

「そりゃあお前さん、祭りで金魚すくいでもやった帰りじゃなからうか」

「おう、それでな、俺も次の祭りで一本打ってみようかと思ってな」

「一本打つって、お前さん・・・」

「おうよ。ちいとばかし屋台をだな」

「そういうことか。それならお前さん、俺の手助けが必要ってもんよ」

「お、なんか手伝ってくれるのか？」

「おうよ。金魚すくいをするにしても、道具が必要だろ」

「そうだな。俺だけのやりくりじゃ、ちと心許ないってか・・・」

「そうだろう。だから俺がお前さんを手伝ってやろうと思ってな。金魚すくいの道具ならこの前ちいと手に入ったもんでな」

「そりゃあ頼もしい。そんじゃあ手伝ってもくれよ。報酬は売り上げから折半すればいいよな」

「その話乗った。そんじゃあ俺も用意しとくからな」

二人の男が酒屋で酒を飲みながら笑っていると、その端を一匹の猫が通り過ぎた。

「おーし、用意できた」

「おう。こっちの方も大丈夫だ」

祭りの一角に陣取り、用意した金魚の半分を水槽に流し込み、残りをバケツの中に流しておいた。

「なかなか人がこねえなあ」

「金魚すくいなんぞ今は流行らんのかなあ」

ふと男がバケツに目をやると、何やら金魚が減っているような。もう一人の男に聞いてみた。

「おい。バケツの金魚知らないか？」

「俺は何も触ってねえぞ。もしかしてお前、パクっちゃいねえだろうな」

「そりゃあお前さん、早とちりだよ」

「でもお前以外このバケツには触ってねえぞ」

「じゃおまえ、どっちが正しいか金魚すくいで勝負つけようじゃないか」

「お前そんなことしたら、お客さん」

「俺は勝負がつくまでゆずらねえぞお」

「仕方ねえな。わかったよ」

二人の男が必死になって金魚すくいを始めると、何やらそれが目立ったらしく人が集まってきた。野次やら何やらが飛び交う中必死になって救った金魚はのちにお客に配られ、残った金魚も少年やら少女やらに捌われていきました。

そんな中、路地裏の猫は失敬した何匹かの金魚をおいしくいただきましたとさ。

投稿時刻 : 2013.08.17 20:05

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.533

金魚累々

Wheelie

「金色じゃないんだ」

教科書から立ち上がるホログラフィーを見ながら、美来は夢見るように言った。

「赤いんだね。お祭りの日に金魚をすくうんだって」

史子は注釈を読む。水の映像の中を金魚が一匹、悠々と泳いでいる。教科書を挟んだ向こうの美来が、水色にゆらゆらと輝いている。

「素敵」

本を閉じると映像は消えた。寂しそうに目を伏せる美来に、史子の胸は締め付けられる。

史子にとって美来は初めての友人だった。この国にはもう女子は殆ど生まれてこない。史子はネットで CAD データを検索する。金魚は見つからない。小遣いで買えそうな値段で、フナのデータを見つける。なんとかできるかも知れない。美来に笑って欲しいと史子と思う。

「フナのデータ？」

「うまくいくといいけど」

史子と美来は夜の中学校に忍び込んでいた。

「形状を金魚に似せて作り直したの。筋収縮のプログラムも組んだ」

給食室の鍵を開け、細胞のパックを探す。

「マグロとタイ、どちらの細胞がいいと思う？」

「食べるわけじゃないしどっちでも」

3 D プリンターに細胞と改造フナのデータを入れる。温度が上昇し細胞分裂が開始する。十分後、小さな赤い魚の形状をした食肉が十個出力される。

「泳いだ！」

寸胴鍋に入れられた食肉は尾びれを振り泳ぎ始める。

二人は金魚を夜のプールに放った。

「生きているみたいなのに、繁殖能力は無いんだね」

美来は魚影を目で追っている。

「私達と同じだね」

体内のカルシウムを使い切ってしまうと、筋収縮は停止し腐敗が始まるはずだ。史子は泳ぐ影を数える。
一、二、三……。

「じゅうさん？」

「これを見て！」

美来が足元の金魚を指し示す。頭部が二つあるそれは、悶えるように水中で身を振る。食肉は二つに分裂する。

「うそ、どうして」

気付けば水中の金魚は随分と増えている。美来の笑顔が白く光る電灯に照らされる。

「金魚すくいしよう！」

金魚すくいがどんなものか二人は知らなかったけれど、制服のままプールに飛び込み食肉を追いかけた。手のひらですくってはバケツに入れる。水音と二人の笑い声が夜に染みていく。

二つのバケツは金魚で一杯になった。

「これどうしようか」

「海に放しに行こうよ」

事も無げに言う美来に、史子は驚く。

「大丈夫かな」

「どうせこの世界はもう長くないんだし」

大切そうにバケツを抱えた美来。濡れた髪。無邪気な微笑み。

「そうだね」

この笑顔をもっと見ていたいと史子と思う。それから金魚で一杯になった海も。

投稿時刻 : 2013.08.18 09:47

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.500

私は出目金

ひこ・ひこたろう

自転車に乗って学校から帰っていると、目の前に黒いバンが停まって、中から数人の男が現れた。「何かやばそうな状況だわ」と意外に冷静だった私だが、打つ手はない。

男の一人が自転車を蹴飛ばし、倒れた私は引きずられるようにバンの中に閉じ込められた。「これから私どうなるの?」「俺たちの慰みものになるのさ」「命だけは助けて欲しいんだけど」「助けてやるさ、命だけはな」

男たちは約束を守った。私は脳を黒の出目金に移植されたが、確かに命だけは助かった。私は金魚鉢に入れられ、絶えず男たちに観賞された。慰みものとは、こういうことだったのか。何しろこっちは一糸まとわぬ姿である。恥ずかしいったら、ありゃしない。

私は退屈な毎日に数週間ひたすら耐えた。その日の午後、大きな地震が起こり、私は金魚鉢ごと床に投げ出された。「早く戻してよ」との叫びもむなしく、私は床の上でぴちゃぴちゃ跳ねるだけだ。「うう、このままでは遠からず干からびてしまう」死を覚悟した私だったが、その時轟音と共に再び建物が揺れ、気がつくやうに部屋には水が満ちていた。ケリラ豪雨か、はたまた津波か……。きっと津波だ。私は泳いで部屋から脱出した。

みなさんも一度出目金になってみるとわかってもらえると思うのだが、出目金のしっぽはそれ自体が抵抗になっているので、大した推進力を生みはしない。気持ちは先走っても、なかなか前に進まないのだ。しかし、この突き出した大きな目のおかげで、私は広い視界を持つことができ、水の中のありとあらゆる障害物を察知するのに好都合だった。機動性のなさを補って余りある能力だった。

無我夢中で泳いでいると、やがて広い海に出た。「目はこのままでいいんだけど、もっと泳ぎやすい尾ビレが欲しいな」そう思った途端、私はさっきよりもすいすい泳げるようになっていた。よく見える目で後ろを確認する

と、私の尾ビレは先祖のフナみたいに変わっていた。

「どうせなら、上半身は元的女子高生がいいな」

するとどうだろう、いつしか私には両腕が生えており、おっぱいだってあった。念のため下半身に手を伸ばしてみると、へそから下は魚のままだった。どうやら、一度変形した部分はそのままだようだ。

私は人間に捕まり、水族館の中で人魚として生きることになった。「いいおっぱいだ」と褒めてくれるのは有難いのだが、「目はこのままでいい」と思ったせいで、人間の顔でありながら目だけは出目金なのであった。

投稿時刻 : 2013.08.18 14:05

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.462

《ライブ執筆賞》
ポンプ
松浦徹郎

夏祭り。
境内に屋台が集まり、騒がしくなる頃。
決まって俺は、腹に耐えがたい不快感を覚える。
ああ、あいつらだ。あの眷属だ。
さびの浮いたような色の頭髮。しげるの出来損ないかと思うような日焼けした肌。
ヤンキーだ。
アメリカ人という意味ではなくて。できの悪い日本人の方。
彼らとすれ違うたびに、腹部でヤツが動くのだ。俺の気持ちに応えるように。
ひゃひゃ、というゲスな笑い声が聞こえる。また今日もひとり、千代田区の愛好家が渋谷区の愛好家によってたかって『親愛の情』を示されるのだ。

高校1年の夏だった。
まだ、俺は俺だけの存在で。腹にヤツはいなかった。
夏祭りに行くまでは。
俺はありがた迷惑な親愛の情をかけられて、祭りの中にいた。本当は家でじっとしていたかった。だが、あいつらには『はけ口』が必要だった。取り巻きのために、最下層を用意しておかなければならないのだ。
「じゃあ、罰ゲームな」
俺が「そろそろ帰る」というと、あいつはそう切り出した。
「何がいいと思う？」
原作ジャイアンをさらに悪化させたようなのが、取り巻きに振る。
「そうっすねえ」
いくつか案が出された。どうでもいいような案だ。すべて却下される。
予定調和だ。最初から、決定権はあいつにしかないのだから。
「そうだ露木、これ飲めよ」
さも今思いついたかのように、さっきすくった金魚を掲げ、あいつはいう。
なんといって拒否したのかは覚えていない。たぶん、「あー」とか「うー」とか。きっとそなんだ。

「聞こえねーなー」

「だから……。淡水魚は危ないって……」

「聞いたか？ 今、露木先生がなんか教えてくれちゃったぞ」

取り巻きが一斉に笑いだす。

「ぐだぐだ言ってねえで、早くしろよ？」

俺の眼前に、ポリ袋に入った金魚がいた。

赤く。ぬめつとした鱗まではっきりと見えた。

「そら。露木が人間ポンプやるぞー！」

取り巻きが騒ぎ出す。

そして俺は、腹に金魚を飼うことになった。

「きみ。今日は暑いね」

俺は渋谷区代表の、しげるもどきの肩を叩く。

「あ？ なんだよおっさん」

かつての俺ならひるんだだろう。だけど、今は違う。

「泳ごうか？」

静かに俺はいう。

「やめろよ。なにすんだよ！」

彼は手を払いのけようとしたが、俺の肌はぬめり、抵抗を許さない。

俺はそのまま彼を掴んだまま、池の中へと入った。

彼らは水の中では生きられない。俺は共生相手のおかげで生きていける。

だからしげるもどきの心臓が止まるまで、俺は水中でじっとしていた。

投稿時刻 : 2013.08.17 23:03

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.385

おはかまいり

めぐる

高校大学とバイトに明け暮れていたものだから、社会人になってぽんと与えられた盆休みには心がおどった。

とはいえレジャー施設はどこも混んでるみたいだし、そもそもこの歳になって家族で行くには気が引けるし、レンタルDVDも気になる作品はほとんど貸し出し中だったし、家にいるだけなのも普段の休日と変わらない。

盛り上がっているテレビの画面をいまひとつ自分の生活に取り込めないでいる。

結局何をしようか決めきれずに休み前の最後の出勤を終えて、家に帰ると兄がいた。

「よう。明日からおばあちゃんトコ行かない？」

プールに行かない？と言い出すように、ひょいと食卓から言っただけ。

就職を機に家を出てからも月に一度のペースで、ずっといるかのように違和感なく兄は帰っている。

大学受験の年に行ったきりで、父親の帰省にはしばらく付き合っていなかった。

その父が転んで足をいためたから代わりに兄弟が、ということらしい。

夕食後に母親にガソリン代と手土産を持たされてしまって、あの兄の疑問形はなんだったんだと思いつつ荷造りをした。

降るか降らないかのなんとも言えない天気をくぐり抜けて、昼過ぎには山を少しのぼった祖母の家に着いた。

太陽が今から頑張るぞとばかりに照り付けて、セミもまだまだうるさい。

祖母は思いのほか変わっておらず、にこやかに麦茶と饅頭を出してくれた。

明日はお墓の掃除をしに行くようで、線香なども買い揃えてあるという。

父の母であるはずなのに偶然にも母と同じ行動をしていて、この歳になって両親とその周りの縁を感じる。

手土産を忘れて車へ戻った時に、なつかしい水槽を見つけた。
石造りのちょっとしたもので、それでも夏祭りでとった金魚を放すには充分だった。
お盆に離して年の瀬にまた来る頃には忘れていたから、金魚の消息は一度も知ったことがない。

今更聞くのもきまづい気がして、結局夕飯でもお墓参りの時にも聞けなかった。
藻がはったりしてはいないから手入れはされているみたいだ。
ならば余計に祖母が金魚の世話をしてくれていたことが思い浮かばれる。

結局祖母との時間はそつなくこなされて、あとは兄と運転席を譲り合いながら帰るだけだ。
お互いどこかぼんやりとした顔をしながら高速を走っていると、ふいに兄が口を開いた。

「金魚、水槽の脇にお墓があるんだって」

だからまた行こうぜ、と助手席に座りなおす。
相変わらず降りそうで降らない夕暮れの空に、それらしい形が見えた。

投稿時刻 : 2013.08.18 05:07

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.385

空の金魚鉢にシラハを

犬子蓮木

「すくって来たのどうする？」

「ガーデンで飼おう」

雲の上、高いところ、空中庭園。僕ら天使は、下界よりも高く神様のいる上界より低い、ここ天界に住んでいる。

さっきまで下界のお祭りに行って遊んでいた。そこですくったから、ちゃんと育てないとねって話。

「空気が綺麗すぎると死んじゃうんだって」

「めんどうだなー」

透明な球体をつくり三匹放した。ガラスとかビイドロとかそんな物質ではない透明な壁。中で自由になっている彼らは何を考えているのかわからないけど綺麗だった。

「空気は下界から持ってきて定期的に変えないとダメだね」

「ああ、餌も下界か。とってこないと」

僕らは神様の知識をダウンロードしながら相談する。

「翼がないんだ」

「あるのは天使だけだよ。そっちのがめずらしい」

「鳥はあるじゃん」

「そういうところ細かいよね」

下界に降りて餌をとってきた。恐る恐る食べてみるとなんだかしょっぱい。こんなのがいいんだろか。僕らは首をひねって、笑ってから飛び上がって、上から餌をあげてみる。

「おいしそうに食べてる」

「こういうのをがつついてるって言うんだ」

「これだけじゃ、さみしいんじゃないかな」

「餌のあげすぎはダメだよ」

「そうじゃなくて、家とか寝るとことか」

そうだそうだ、と僕らは家を考える。どんなのがいい？ すぐ作れるけど、ころころ変わったらイヤだよ。なんだかストレスに弱いらしいし。

相談して僕らのうちと同じようにしてみた。白くて丸っこいドーム。

「あ、入ってった」

「気に入ってくれたみたい」

「どのくらい生きるんだろう」

「油断してるとすぐ死んじゃうけど、ちゃんと長生きさせれば転生するかもって」

「ほんとに？　すごいなあ」

僕は神様に呼び出される。

お仕事だって。

餌を置いていこう。

ほんの二週間ぐらい。

帰ってきたら一匹死んでいた。

どうして？

なぜ？

なんでもっとちゃんと見てあげなかったんだろう。

誰かに頼んでいけばよかった。

元気だったら、

子供だって産んで、

もっと増えたかもしれないのに。

動かなくて、

寝ていて、

腐って、

黒く、

死。

「仲間が死んで悲しいかな？」

「わかってないよ、きっと」

「そんな」

「だってこいつら、仲間同士で争うんだ。争って死んだんだ」

「餌がたくさんあれば、よかったんだよ」

「わけあえばいい。それをしなかった」

あんなに綺麗だったのに、もうそんな面影はどこにもない。

死んだ魚のような目をしている。

生きているのに。

生きていたのに。

救えなかった。

投稿時刻 : 2013.08.17 17:10

最終更新 : 2013.08.17 21:11

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.375

《夏の大三角賞》
水槽キンギョ船団
丁史ウイナ

わたしは透明のなかを泳いだ。いたるところから照明がさして影は身を潜めている。けれど壁の外側は、なにもかもを影が包んでいる宇宙なのだ。わたしは泳ぐ。

この船団はいくつかの宇宙船を複合してつくられている。船と船を複数の廊下で連絡し、船団は複雑な蜘蛛の巣のようになっている。船団というよりもひとつの大きな船と捉えたほうが正しいのかもしれない。

わたしはこの広い船団のなかで、雑務に追い回されていた。食糧配給の仕事がようやく済み、いまは待機室のある船に戻るところだ。長い廊下はまるで配水管だ。無重力のなかを掻き進むように泳ぐ。

進んでいると、曲がり角のあたりで話し声が聞こえた。わたしはすぐに道を引き返した。声が近づいてくる。急いでどこか隠れる場所を探したが、影もできないこの廊下に、そんなところはない。そうしている間に太ったキンギョたちの姿が見えた。身を縮めて壁に体を押し付ける。どうかわたしを見ないで。どうかわたしに話しかけないで。どうかわたしを笑わないで。壁の一点だけを見つめてわたしは祈った。

キンギョたちが通り過ぎてからもしばらくはそうしていた。どうやら見逃してもらえたようだ。わたしはホッと溜息をついて、待機室に行こうと壁から目を離した。

そこに鏡が浮かんでいた。

醜い顔。醜い体。一瞬にして現実が網膜を突き破る。じんと縛るような痛みが胸の奥を突き刺した。どこからか笑い声が聞こえる。振り返るとあのキンギョたちがいた。鏡はキンギョたちがわざと置いたものなのか。自分の顔が歪むのが分かった。笑い声がこだまする。

「おい、どうしたんだい奴隷ちゃん？ そんなところでサボってちゃ駄目だろうがおい」

キンギョの飛び出た口と目が、わたしの背中を舐めるようにさすった。体が震えるのを止めることができなかった。

「おいおいこいつ、おまえの言葉に感動して泣いちゃってるぜ」

笑い声の渦のなか。どうして。どうしてなの。どうしてこんな体に生まれたの。どうしてわたしはヒレを持っていないの。どうしてわたしには二本の手があるの。どうして二本の足があるの。どうして。

どうしてヒトはこんなにも下等なの。

「おいお前たち！ なにをしている」

偶然通りかかったキンギョの長官が、声を張り上げた。鏡がまだ漂っている。

太ったキングヨたちはうろたえるように口をぱくぱく動かす。わたしは顔を上げた。

「道具を粗末にするな！」

鏡に映るわたしの顔に、影が差していた。

投稿時刻 : 2013.08.18 04:31

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.312

《シリーズ作品賞》

世界遺産シリーズ1 狂王からの贈り物

世界遺産シリーズ2 人間ポンプ、長城をゆくはこちら

しゃん

露店の主は、王の生まれ変わりだという。

「わたくし、人をたくさん殺してきた。だから、シャッチョーに幸運さずけまーす。このぼい、どぞどぞ」

ビーチパラソルの下には、年季が入った金だらいが一つ。

中を覗き込むと、暑さにやられた金魚が数匹、息も絶え絶えに泳いでいた。

「シャッチョー、お金の魚、いっぱい。さ、やってみて、やってみて」

気付けば、わずかばかりの代金と引き換えに、私はぼいを受け取っていた。

王の生まれ変わりを名乗るだけあって、商才がたくましい。

ぼいには、見慣れない文字が描かれている。

聞けば、この国の言葉で「財」を表すらしい。

ビーチパラソルの脇にはのぼりが立っており、英文で「Scooping Moneyfish」とある。

一体、どこでそんな悪知恵を身に付けたのか。

男は金魚を金運のある魚と称し、さらに縁起をかつぐぼいで客を呼び込むのを生業としているようだった。

ここがまだ、日本や風水文化のある中国なら分かる。

が、私がいるのはそのはるか南西、スリランカ。

私はある決意のもと、この国を訪れた。

父王を殺し、弟の報復を恐れて、巨大な岩山へと逃げ込んだ男の居城。

世間ではシギリヤ・ロックと呼ばれる世界遺産の観光へ来たのだ。

生きる気力が完全に尽きるその前に、親族との戦いから気がふれた王の生きざまを垣間見たかった。

もはや私を慰めてくれるのは、このシギリヤの岩しかないのではないかと思ったのだ。

しかし、その岩の前の広場には、件の男が飄々と露店を構えていた。

シギリヤの岩を世間に知らしめているのは、実は狂気の王の人生ではなく、艶やかな天女の壁画だ。

心を病んだ王を慰めるために描かれた天女たちは、今や主人を差し置いて、この居城のホストとなって

いる。

非業の最期を遂げた王を悼む者など誰一人としてなく、それならば貧相な姿の金魚すくいに生まれ変わったのも納得だ。

そうして男に勧められるまま、ぽいを手にした私だが、不思議なことにその瞬間から生きる希望が湧いてきた。

このぽいに、「夢」や「恋」などと描けばどうなるか？

そして上手く金魚をすくえたら、願い事がかなうとしたら？

旅行カバンを足元に置き、いけるな、と私は意気込んだ。

商機はここにあり。金さえあれば、身内に頼らずとも暮らしていける。

が、気付けば、足元のカバンが消えていた。

スリランカに来たけど、スリなんか？

半分泣きながら、文字入りぽいのネーミングはテキストぽいだな、とつぶやいた。

投稿時刻 : 2013.08.18 00:23

最終更新 : 2013.08.18 04:25

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.231

泣かなかった日

伊守梟

ぼくはおかあさんに買ってもらった金魚ばちを見ている。中には金魚が三びきいる。きょねんの夏まつりでぼくがはじめてすくった金魚だ。

おかあさんはぼくに金魚ばちを買ってくれてからしばらくして、びょういんに行くことになった。たしか、きょねんの夏休みがおわるころだったと思う。おとうさんは、「タカシはしんぱいしなくていい」って言ったけど、三人の中で一ばんしんぱいそうなかおをしていた。おかあさんは、「ごめんね」と言ってぼくのあたまを何どもなでてくれた。

「ぼくはへいきだよ。うんどう会で一ばんになるし、がくげい会も一しょうけんめいがんばるよ。だから、おかあさんも早くよくなってね」

ぼくは少しさびしかったけど、めいいっぱい元気よく言った。おかあさんはわらってくれたけれど、おとうさんはなにも言わなかった。

金魚はかわいそうだ。小さな金魚ばちの中で一年もすごしている。でも、ぼくはどうしたら金魚がよろこぶのかわからなかったし、おとうさんも、「わからない」と言っていた。

ぼくは大きな金魚をおとうさん、つぎに大きな金魚をおかあさん、一ばん小さい金魚をぼくだと思うようになっていた。

おとうさんの金魚ごはんをたくさん食べる。おかあさんの金魚はゆっくりとおよいでいる。ぼくの金魚はそこのほうでおどおどしている。

ぼくはさびしくなった。おかあさんはまだかえってこない。たまにあいに行くと、どんどんやせほそってみたいに見える。金魚たちもさびしい思いをしているのかもしれない。きつとかぞくとはなればなれになってるんだ。

ぼくは川ににがしてやろうと思った。金魚たちを自由にしてあげようと思った。

おとうさんは青ざめたかおでぼくを車にのせて、おかあさんがいるびょういんへ向かった。こんなことははじめてだけど、よくないことがおこっているのはわかったから、ぼくはなにも聞けなかった。

びょういんにはうごかなくなったおかあさんがいた。体にたくさんつけられていたくだも、ぜんぶ外されていた。おとうさんは泣いていた。ぼくはおかあさんをただみていた。

おかあさんはまっ白で、まるでねむっているみたいだった。

ぼくはおとうさんに「金魚をにがしてやりたい」と言った。おとうさんはなにも言わなかった。おかあさんが一年かんいたびょういんから、家にかえってきた。

ぼくはちかくの川に金魚をにがしにいった。川にはなされた金魚がしあわせなのかどうか、ぼくにはわからなかった。

投稿時刻 : 2013.08.17 22:41

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.214

金魚売

松浦徹郎

「ねえ！ 昨日わたし見たよ」

バン！ と、僕の机に両手をついた下村優花が開口一番にいった。

「あの金魚売のおじさん、昨日も全然売れてないのに、ちょっと笑ってて……。それで正体を突き止めてやろうと思って追いかけたんだから！」

「ふーん」

朝の教室で、僕の席にやってきて武勇伝を語るクラスメイトに、心底ドウデモイイという感じの返事をする。

「あー！ その顔は信じてない時の顔だ！」

「失礼だな。これはふつうの時の顔だ。平常だ」

「信じてたら、ヘイジョウなんかでいられないはずでしょ？」

優花はいっそう身を乗り出し、「べつに～」という感じの僕に迫る。

「じゃあ聞くけどさ。あの金魚売のおじさんは、どこに帰って行ったの？」

僕は問題の本質をつく。

そもそも全ては、優花の「売れ残った金魚は安くなるに違いない」という思いつきから始まったことなのだ。目下、彼女の関心はアクアリウム作りにあった。

「いや……。えっとね、見つけたんだけど、途中で見失っちゃって」

「どうやったら、あんなゆっくり歩いているのに見失うんだよ？」

「だってあのおじさん、ずっとトイレにも行かないし、飲み物も飲まないし」

「それで結局アレだろ？ どこから来てどこに帰って行ったかはわかんないんだろ？」

「うう、たっくんのイジワル……」

この季節、近所を歩き回っている金魚売のおじさん。

あの人は、どこの誰なのか？ それを語るのが、僕らの小学校でちょっとしたブームになっていた。

「でもね、5 時間目が終わってすぐなら団地の広場にいると思う」

「なんで？」

「団地のおばあちゃんが、そういつてたから」

僕は放課後はたいてい図書室に行くから、そういうことは知らない。

「ね、行こうよ！」

「どこに？」

「今日こそ、おじさんの隠れ家を突き止めよう！」

優花は一人で「おー！」と手を突き上げている。

「でも僕、掃除当番」

「じゃあ、広場で待ち合わせね」

そんな勝手なことをいって、優花は自分の席に戻っていった。

放課後。

掃除を終えた僕は一人家路につく。

広場には行かない。団地には近づかない。

誰もいない家に帰り、無数の水槽に包まれてぼんやりと過ごす。

優花は約束を破ったといって怒るだろう。でもこれでいいんだ。

やがて「ただいま」という声とともに父が帰宅した。「さあ、高橋熱帯魚店の開店時間だ」などといいながら、両側を水槽に挟まれた狭い通路を器用に歩く。

そして、売れ残りの金魚を数匹取り出し、ピラニアの水槽に放り込むのだった。

投稿時刻 : 2013.08.17 18:25

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.200

いちねん金魚

まな

今年も暑いなあ、暑いなあ、と思っているうちに、ベランダの水槽で金魚が浮いていた。

「うそでしょ」

キッチンから出て来た妻が僕の肩に手をかけ、頭の上から覗き込んだ。

「あ、ホントだ、茹であがっちゃったのかな？」

女性というのは、ときどきドキッとするような残酷な言葉を吐く。

「茹であがったとか、ひどくないか」

それでも、金魚すくいで僕が救ってやった金魚なのだ。

「何言ってんの、エサやってたのも、水換えてるのも全部私じゃん。でもさ、どうしようもないじゃん、暑すぎるもん、ベランダの金魚にエアコンは付けられないし、日陰においてこれじゃあ、、もっと、も一つと大きな水槽なら、そう温度が上がる事も無いと思うけど、水換えるの大変になっちゃうしね。」

ぶかーっとゆらゆら浮いている金魚を見つめて、妻に聞く、

「で、どうする、これ？マンションじゃ埋めるところが無いし、公園まで行こうか？」

面倒だが、仕方ない。金魚の金ちゃん（今名付けたのだが）のために重い腰を上げようと覚悟したが、

「ティッシュでくるんでトイレに流すわ。」

ひ、非情だろう、おまえ、そりゃないぜ、と、顔に出ていたのを察したのか、

「えーみんなやってるよー、生ゴミに入れるとすぐに臭くなるんだもん、生ゴミ、今朝収集しちゃったし。」

あ、そう、臭くなるの、って、昨日まで元気だったんだぜ、エアコンの効いた部屋から、ベランダの窓越しに、ゆらゆら泳いでえ。金ちゃ〜ん。

夕方、買い物に出かけると、駅の近くの小さな神社で夏祭りをやっていた。

「あ、金魚すくい」

そう言って妻の顔をチラッと見ると

「水槽、空いちゃったね」

そう言って屋台の明かりに照らされた妻の横顔は、無表情で何を考えているのかよくわからなかったが、

「去年、ここですくった金魚だったのにね。」

と言ったのを聞いて、自分がどこであの金魚をとってきたのかすっかり忘れていた事に気付いた。

さらに妻が続けて言った。

「水槽売ってる店がなかなか無くてさ、スーパー何件もハシゴして、ペットコーナーにあった一番大きな水槽を買ったのに、死んじゃうんだもん。冬は乗り切ったのになぁ。」

僕は、自分が何も覚えていないことをちょっと反省した。

ダンナが無責任に連れ帰った金魚を、それなりに大事にしていたのだ、彼女は。

「今年も救っていいかな？」

恐る恐る妻に尋ねる。

「いいよ、死んだ時トイレに流しても文句言わないなら。」

妻が財布から 500 円を出しながら言った。

投稿時刻 : 2013.08.18 15:11

総文字数 : 1000 字

獲得☆ 3.727

※制限時間後に投稿

金夜、近所で、金魚すくい

とおる改

地元の夏祭りは金曜日から始まる。けれど、土日がメインだから屋台も半分くらいしかやっていない。お祭りは始まっているけれど、中途半端。それが金曜日。私たちは、金曜に少しでもお祭り気分をかじって、土日はデートで遠くへ行くのだ。

……まあ、彼氏がいたら、そうしたいのだ。

今年は夏祭りに行くつもりもなかった。ミカにもサチにも彼氏がいて、そんな二人のダブルデート計画において私は邪魔者でしかなかったから。

大好きな小説家の新作を読みながら冷房の効いた部屋で週末を満喫する。それは完璧な計画のはずで、目に見えないお祭りの空気にイラつくのは時間の無駄なのだ。

「シズ、金夜に夏祭り行こうぜ」

だから、いきなりお前がそうやって夏祭りに誘ってくるのは完全に想定外で、男連中と遊んでいればいいのになんでまたあたしなんかを誘うのかな。

「いや、左腕折れてるとバカ連中と遊ぶのもキツいからさー。シズも暇なんだろう、金夜。久しぶりに行こうぜ、夏祭り」

いやだ。

「おっと、幼馴染を蔑ろにすると、いざという時に困るぞー？」

どんな時だバカ。あたしには予定と計画と完璧な週末が待っているから、目の前から消えたまえ。

「冷たいねえ。まあいいや。じゃあ、いつもの場所に六時な。金魚すくいしよう」

おい、人の話を聴けバカ。

「まあまあいいからいいから。うちの水槽、寂しくなっちゃってさ」

……死んだの？ あの金魚。

「まあ、長生きしたよ。シズの救った金魚は」

そう。

「と、いうことで、シズ様の天才的な金魚すくいの腕前をお借りしたく」

安い土下座せんでよろしい。そか、死んじゃったか。

「おい、あんまりしんみりすんなよ」

うるさいなー。わかった。六時ね。お金持っていないから。

「げ。わ、わかった。……浴衣で来るよな？」

近所の夏祭りにわざわざ浴衣？ 相手はあんたなのに？

「俺は、デートのお誘いのつもりなんだけど」

いや、冗談はやめてよ。こちとら暑い日に熱々に挟まれてうだってんのに。誰でもいいんでしょ？

「俺は、シズしか誘わねえよ。金魚すくいの名人じゃなくても、浴衣じゃなくても、いいけど」

な、なんでそんな顔真っ赤にしてんのよバカのくせに……。

……六時ね。

「そう」

あたし、金魚すくいって好きじゃないの。すぐに死んじゃうし。

「うん」

でも、ケンの家の玄関で、元気な姿を見るのは、嫌いじゃなかったよ。

「うん」

浴衣、着ていてもいいけど、土日の予定も考えておきなさいよ。近所のお祭り以外で。

同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

お題の「金魚」を取り入れた Twitter 小説を書いちゃった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。ぜひこちらの作品もあわせてお楽しみください。

第8回てきすとぼい杯のお題で **Twitter** 小説

<http://togetter.com/li/559614>

※他にも関連する作品があればリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

また、Google+ ハングアウトで開設しました「第8回てきすとぼい杯休憩所」にて、金魚にまつわる川柳・短歌を即興で作ってくださった方がいらしたので、ここにご紹介させていただきます（敬称略）。

風呂上がり小僧は金魚に餌をやり [ayamarido, 8/17 18:06]

窓の外金魚鉢を見る猫二匹 [ayamarido, 8/17 18:18]

金魚なる魚を見せよと室町殿 [ayamarido, 8/17 18:25]

水槽の金魚の尾に糞が付き [ayamarido, 8/17 18:26]

酸欠の金魚は口をパクパク [ayamarido, 8/17 18:27]

曲芸の金魚吞みたまに腹下し [ayamarido, 8/17 18:28]

金魚鉢もっと早けりゃ入ったのに 今更かぶると言い出わが子 [めぐる, 8/17 18:48]

夜の金魚覗き込めば泳ぎ出す [ayamarido, 8/17 21:50]

名句をひねった気になる七五調 [ayamarido, 8/17 21:54]

らんちゅうを取り損なって猫が落ち [ayamarido, 8/17 21:54]

ニャンちゅうが みたらし団子を 取り損ね [松浦徹郎, 8/17 22:02]

コンピューターおばあちゃんは金魚飼い [ayamarido, 8/17 22:05]

じゃじゃ丸のポロリにピッコロ赤面し [ayamarido, 8/17 22:10]

ピッコロとじゃじゃ丸来たぞと金魚逃げ [ayamarido, 8/17 22:17]

らんちゅうは からまるように くらげ食べ [ayamarido, 8/17 22:27]

残酷にくらげの毒針金魚刺し [ayamarido, 8/17 22:27]

終わりに

てきすとばい杯第8回は、夏休み真っ只中の開催ということもあって、いつもの1時間15分制限を拡張し、24時間耐久1000字ジャスト対決、とさせていただきます。

これがなかなかご好評いただきましたようで、今回は過去最高となる24作者38作品ものご参加をいただき、審査期間を一週間延長させていただくなど、夏らしい、大変に盛り上がった回となったのではないかと感じております。ご参加、ご協力くださった皆様には、まことにありがとうございました！

執筆の制限時間が長かったこともあり、今回は新しい試みとしまして、期間中の皆様のツイートを実況まとめとしてリアルタイム更新させていただいたり (<http://togetter.com/li/550158>)、Google+ のハングアウトにて休憩所を開設し、執筆の合間にお立ち寄りいただいたりと、通常回とは少し違った雰囲気での24時間となりました。

また、ハングアウトの休憩所では、突発的にライブ執筆中継が始まりまして (いろいろと準備不足もありご迷惑をおかけしてしまいましたが)、まさに夏祭りらしい、盛りだくさんの回となったように思います。

また、審査におきましては、1,000字ぴったりの作品がずらりと38作品、いつもよりもぐっと作品数が多く、またどの作品もそれぞれに趣向が凝らされ完成度が高く、☆3点台後半になんと27作品が並ぶなど、非常な接戦となりました。

その中でも、際立って特徴のある作品、意外性のある作品が高評価を獲得した印象があります。

――最後になりますが、今回、普段とは違うルールでありながら、これほど多くの、読み応えのある魅力的な作品をお寄せくださいます、まことにありがとうございました！

次回からまた、字数制限なし、制限時間1時間15分での開催へと戻りますが、時々このような変則ルールでの開催を織り交ぜていきたいと考えております。

次回以降もてきすとばい杯を、どうぞよろしくお願いいたします。

2013年9月16日
てきすとばい杯 運営担当

※なお、次回てきすとばい杯は、2013年9月21日(土)開催の予定です。



作品集電子書籍を
Puboolにて頒布中。

言葉の茂る 樹が育つ。



てきすとぽいは、競作や共作を支援する
テキスト創作サイトです。一人ひとりのウエブ
作家たちが、競作・共作を通じて結びつき、
感想やアドバイスを、採点などをかわしながら、
よりよい作品を創ることを目指しています。

作家同士が言葉を交わしあい、言葉のやり
とりが豊かに茂り広がっていく。そんなサイ
トにあなたも参加して、一緒に創っていきま
せんか？

いまはまだ、小さく芽吹いたばかりですが、
いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集
〈第8回〉

<http://p.booklog.jp/book/76827>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76827>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76827>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



てきすとばい杯